

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

2003年度に津島岡大遺跡において実施された立会調査は、事業数で24件を数える（表1・図16）。全体として掘削深度が深く、規模の大きな工事が多くなされた結果、立会調査によって遺構の確認や旧地形の復元のためのデータ等、有益な知見を得ることができた。

長期的に実施された主な工事業として、旧事務局庁舎の移築に伴う工事や自然科学系総合研究棟新営関連の工事、農学部総合研究棟改修工事、公共下水桷接続工事があり、立会調査を随時行った。なかでも、公共下水桷接続工事と自然科学系総合研究棟新営にかかわる工事では、たびたび縄文時代の土層まで掘削がおよび、比較的多くの遺構を確認した。

以下では、はじめに、特に重要な知見が得られた公共下水桷接続工事（表1 調査番号21）と自然科学系総合研究棟新営（同8）に伴う立会調査について、調査成果の概要を述べる。次に、その他の立会調査地点について、中世段階以下の土層を確認した地点に関して概要を示す。（光本 順）

2. 公共下水桷接続工事に伴う立会調査

津島地区においては、9ヶ所で公共下水桷接続工事が行われた。近世層までの掘削がなされたNo.9区間（職員宿舎）を除く8ヶ所では、いずれも中世段階以下の土層を確認しており、No.1・2・4・6・8区間では縄文時代の土層まで掘削がなされた。ここでは、特に遺構が確認されたNo.2・4・6区間について取り上げ、他の区間については第1節4.「その他の立会調査」の項において土層の堆積状況を示すこととする。

(1) No.2区間（津島南BE～BG10区）

a. 調査の概要

本調査は、津島南地区の東半部、大学構内敷地南端に設置された下水桷と体育館脇の合併処理槽とを接続する污水管敷設工事に伴って実施した立会調査である（図1）。本調査区周辺では、東に約50mの位置に1986年度に実施した第4次調査地点がある⁽¹⁾。調査は2004年2月2日から24日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

① 層序と地形（図2・3）

本調査区は南北約85m（管路長約95m）であるが、全体にほぼ同一の堆積状況を示しており、著しく異なる土層の堆積はみられなかった。各層の時期は、少量の出土遺物とこれまでの津島岡大遺跡の調査成果に依っている。

1層は1907年（明治40年）の陸軍屯営地造成以降の造成土である。2層は明灰色砂質土で、明治時代の耕作土である。3層は明橙灰色砂質土、4a層は明灰黄色砂質土、4b層は明黄灰色砂質土、5層は灰黄褐色砂質土で、近世の耕作土である。6層は明灰褐色砂質土、7層は灰褐色砂質土で、古代から中世の耕作土、8層は灰褐色弱粘質土で、弥生時代から古代までの耕作土であると考えられる。9層は暗赤褐色砂質土、10層は暗褐色～黒

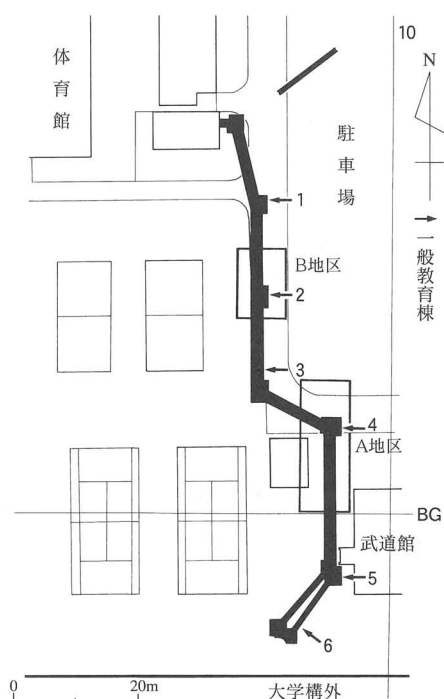


図1 調査区と土層柱状図位置 (縮尺 1/1200)

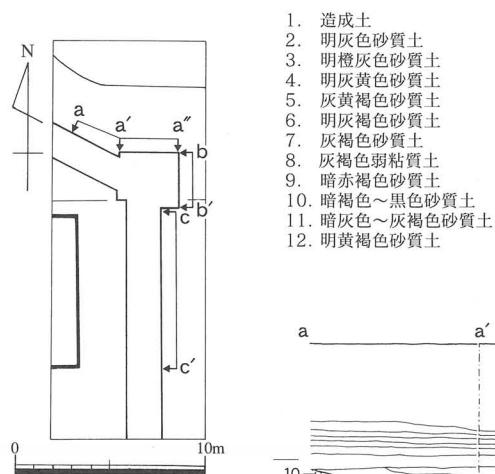


図3 A地区土層断面位置 (縮尺 1/400)

色砂質土、11層は暗灰色～灰褐色砂質土で、津島地区一帯に広がりをもつ「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上面が弥生時代前期にあたる。12層は明黄褐色砂質土で、縄文時代後期の基盤層である。本調査地点は南北約85mの間に谷部や河道といった低地は確認されなかった。縄文時代後期の基盤層でみた地形の起伏は南北で約0.2m、最も起伏の大きい部分の比高も0.3m程度であり、幅の広い安定した微高地が形成されていたと想定できる。縄文時代後期の基盤層が最も低くなるA地区周辺は弥生時代前期の溝が多数掘削される範囲であり、弥生時代には最も低い部分に多数の溝を掘削していたことがうかがえる。ただし、本調査区の東約50mの地点に位置する第4次調査地点では、北東から南西方向に走行する中世段階の河道を確認しており、本調査区南

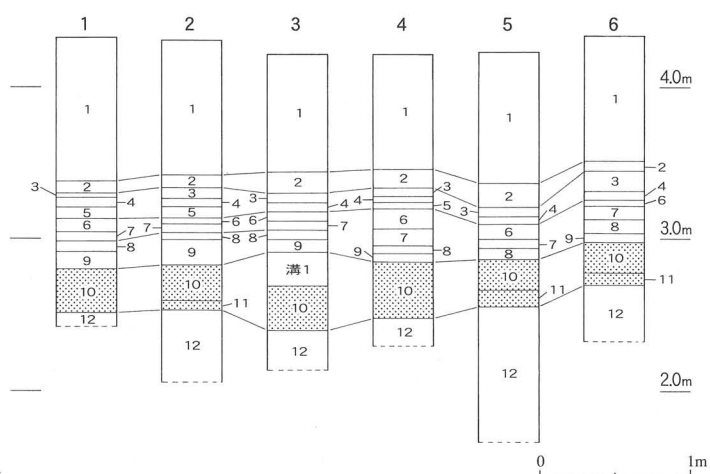


図2 土層柱状図 (縮尺 1/50)

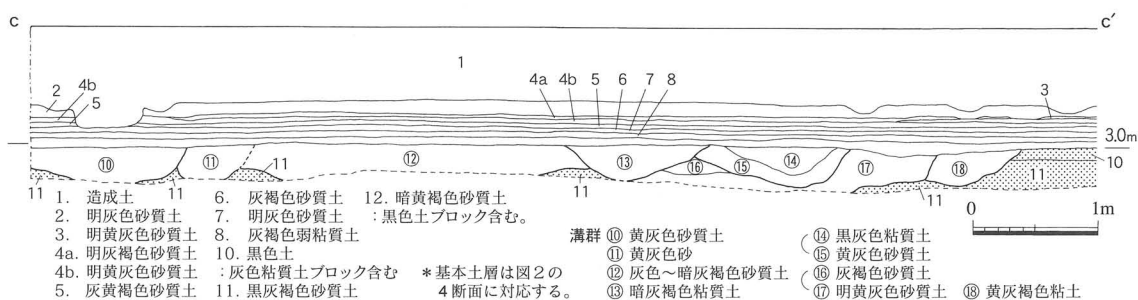
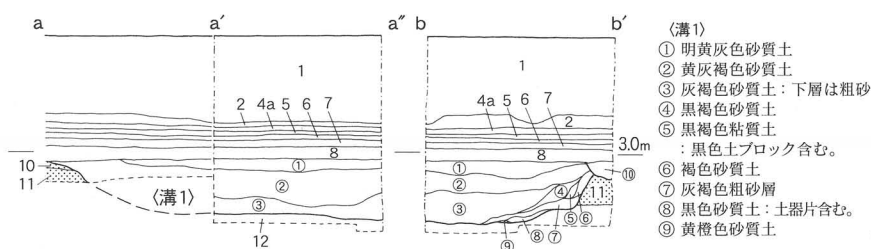


図4 A地区土層断面 (縮尺 1/60)

端よりさらに南にこの河道が通ることが想定される。

② 遺構

遺構が密に確認されたのは、A・B地区である。A地区では弥生時代前期の溝群、B地区では縄文時代後期の土坑・弥生時代前期の溝を検出している。

A地区（図3・4）：約10mの範囲に北東～南西方向の溝が多数切りあいながら掘削されている。溝1からは弥生前期の壺底部片が出土しており、溝1は弥生時代前期に属すると考えられる。

また、そのほかの溝もいずれも溝1の掘削開始面である10層上面から掘削されており、同様に弥生時代前期の溝であると考えてよい。本調査地点から東へ約50mの第4次調査地点でも北東から南西方向に走行する弥生時代前期の溝が確認されており、この一帯では弥生時代前期に多数の溝が掘削されていたことがわかった。

B地区（図5・6）：c - c'以南の枿部分は縄文時代後期の基盤層である12層まで、それ以北の管路部分は10層（黒色土）上面まで慎重に掘削した。この時点で断面を精査したところ、12層から切り込む落ち込みのラインを認めた。そこで精査を続けたところ、大規模な土坑であることが推測された。しかし、管の埋設では、これ以上の掘削を必要としないため、数本のトレンチを入れて、断面で土坑の形状や規模、構造を確認することとし、大部分を残す方針で調査を進めた。

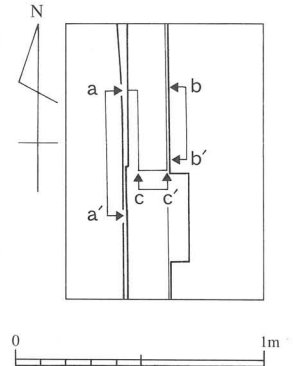


図5 B地区遺構断面位置
(縮尺1/300)

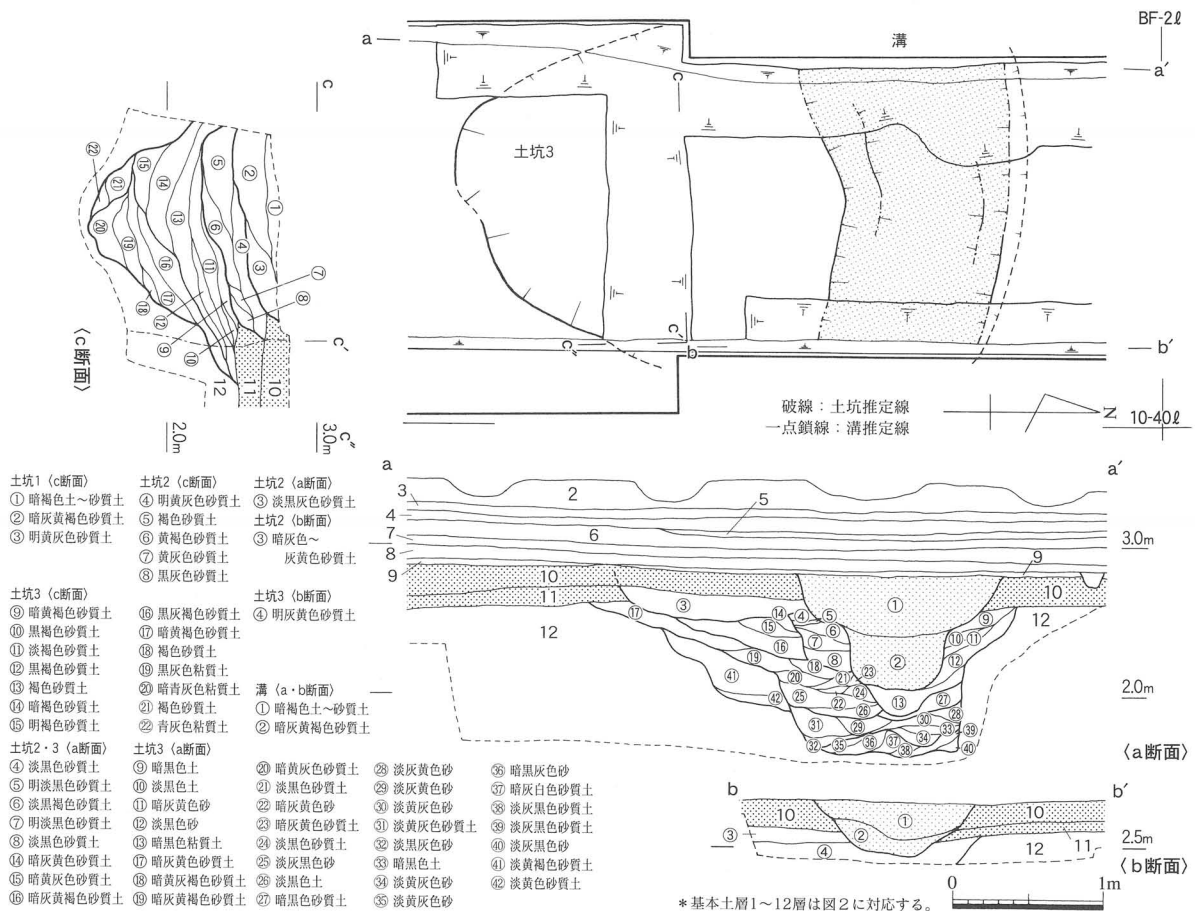


図6 B地区遺構平・断面 (縮尺1/50)

土坑の平面形は、今回の調査区では幅が狭く、全体を明らかにすることはできなかったが、検出できた部分と断面を合わせて考えると、土坑3に関しては長軸長約3.8mの長楕円形を呈すると推測される。また、断面形は、a断面をみると、北側は垂直に立ち上がることで、南側の立ち上がりは緩いことが指摘できる。埋土は北、東側では黄褐色砂質土と黒色土が互層状に堆積するが、南、西側では黄褐色砂質土が主体的である。本土坑から遺物の出土はなかったが、土坑の掘削開始面が縄文時代後期の基盤層である12層にあり、縄文時代後期の所産とみられる。

また、上下2層に細分される黒色土のうち、下位の11層上面からも掘削がなされている土坑2や、c断面では10層から掘削が開始される可能性もある土坑1もあり、縄文時代後期以降、長期にわたって掘削が継続されてきたことが考えられよう。土坑3についてはa断面でも数回の掘削が認められ、このことも長期の掘削を推測することと矛盾しない。

本土坑の埋没後、東西方向に走行する幅約1.1mの溝が10層上面から掘削されている。遺物は出土していないが、掘削面と黒色土が埋土の主体をなすことから、弥生時代前期の溝と考えられる。この溝についても、これ以上の掘削は行わずに保存措置をとっている。

b. まとめ

本調査区は全体的に起伏が少なく、安定した微高地を呈していることが判明した。また、調査区全体で確認できた黒色土より上位の部分では、A・B地区の遺構密度はやや密な状態であることが確認されたが、それ以外は総じて希薄であった。ただし、縄文時代後期の基盤層である12層まで掘削が達したのは榊部分と南側の管路の一部であり、縄文時代後期の遺構密度については確認できていない部分が多い。

縄文時代後期の土坑は、長期にわたって掘削が継続されたものであると考えられるが、その機能や性格については不明な点が多く、今後の検討が必要である。

(野崎貴博)

註(1) 栄一郎1987「屋内運動場新営に伴う発掘調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報4』岡山大学埋蔵文化財調査室 pp.12 - 15

(2) No. 4 区間 (津島北AZ16区)

調査地点は津島北地区の西南端に位置する(図7)。榊部分において、1.3m四方の範囲で、地面から約2m、標高2.05mの深さまで重機による掘削がなされ、12層上面から掘り込まれた東西方向に伸びる溝を検出した。

① 層序 (図8)

確認した各層の帰属時期は、津島地区の土層の堆積状況に照らし合わせると以下になる。1層は、明治時代の造成土、2層は暗青灰色砂質土で明治時代の耕作土である。3・4層は黄褐色砂質土、5・6層は淡黄褐色砂質土で、近世層と考えられる。7・8は灰黄白色粘質土、9は暗黄灰色粘質土で中世層と考えられる。10層は暗灰色粘質土で、古代～古墳時代頃の土層、11層は暗黄褐色粘質土、12層は暗黄灰色粘質土で、弥生時代中期～後期の土層と考えられる。13層は黒褐色砂質土で、津島地区の鍵層である「黒色土」(弥生時代早期～前期)に相当する。14層は黄褐色砂質土で、縄文時代後期の基

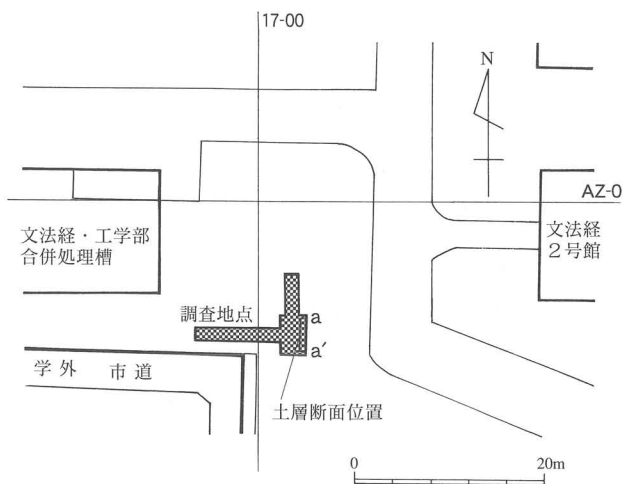
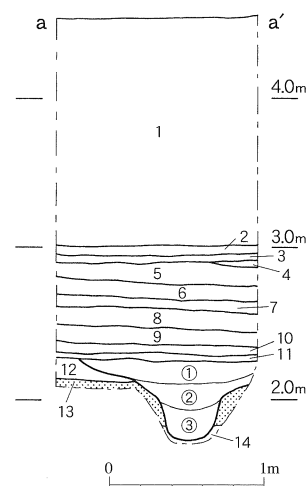


図7 No. 4 区間調査位置・土層断面位置 (縮尺1/800)

盤層である。

② 遺構 (図8)

12層上面で検出した溝は、上面で標高2.25m、底面で標高1.725mに位置し、東西方向にのびる。幅は上端が現状で1.2m、底面が0.25mを測る。溝の断面形は、中央部分がU字形にくぼんで深くなり、それより上は両側に緩やかに開く形となる。溝の埋土は、3つに分層される。そのうち、上2層の埋土は色調や含有するブロックの内容において比較的類似している。断面の形状と併せて考えると、埋土第1・2層と第3層とは、掘削あるいは堆積の時期や要因が異なることが考えられる。溝から遺物は出土していないが、層位関係から弥生時代中期～後期頃の遺構であると考えられる。(光本)



- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 造成土 | 12. 暗黄灰色粘質土 |
| 2. 暗青灰色砂質土 | 13. 黒褐色砂質土 |
| 3・4. 黄褐色砂質土 | 14. 黄褐色砂質土 |
| 5・6. 淡黄褐色砂質土 | |
| 7・8. 灰黄白色粘質土 | 〔溝〕 |
| 9. 暗黄灰色粘質土 | ① 暗黄褐色砂質土 |
| 10. 暗灰色粘質土 | ② 暗黄褐色砂質土 |
| 11. 暗黄褐色粘質土 | ③ 暗灰色砂質土 |

図8 No. 4区間 樹東壁
土層断面 (縮尺 1/50)

(3) No. 6 区間 (津島南B G22区)

本調査地点は、津島南地区の西端付近に位置する (図9)。

① 層序 (図10)

樹部分で標高1.95m、管路において標高2.4mまで重機による掘削がなされた。深度の深かった樹部分では「黒色土」が認められず、縄文時代の基盤層に相当する黄褐色砂質土 (6層) を標高2.15m付近で確認した。したがって、旧地形としては微高地をなしていたものと考えられる。

2層は、津島地区における近代層に相当し、3つの層に細分される。樹部分の西壁においては図示した東壁よりも2層が20cmほど高く堆積しており、東壁と西壁の間で段が形成されていたことが推定される。3・4層は近世～中世の土層と考えられる。5層は須恵器小片や鉄滓が出土し、古代から古墳時代後期に相当する層と考えられる。

② 遺構 (図10)

樹周辺において遺構を確認することができた。近代の畦畔状遺構、弥生時代終末から古墳時代初頭のピット等を検出した。

畦畔状遺構は、2a層の堆積後に形成される。東西にのびると考えられ、現状で南北幅3.5mを測る。畦畔状遺構の北端は段状に掘削されている。一方、南端は、樹より南側の管路部分で矢板を使用した掘

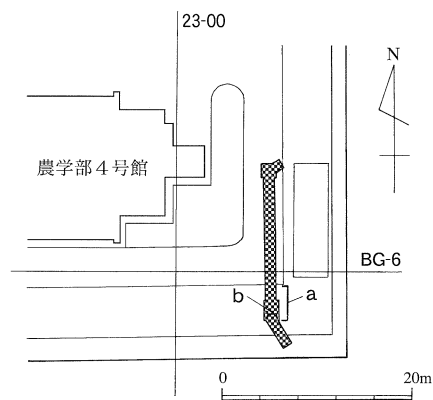


図9 No. 6区間 調査区・土層断面位置
(縮尺 1/800)

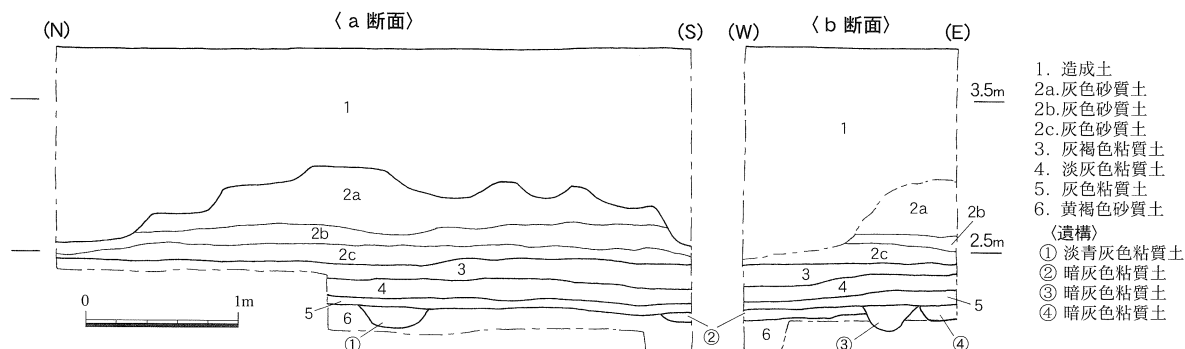


図10 No. 6区間 土層断面 (縮尺 1/50)

削がなされたため明確でない。明治期の地図によると、「L」字状に東と北へのびる道が本調査地点に相当する場所に存在しているため、畦畔状遺構はこうした道と何らかのかかわりがあるものと推測される。

榊部分の東壁断面では、須恵器を含む遺構（土層番号①）を確認した。この遺構は、それと対応すると思われる遺構が反対の西壁に認められるため、溝である可能性が高い。遺構から出土した須恵器が小片であるため、詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期～古代とみてよいであろう。

榊部分の東壁端から南壁にかけては、6層上面に遺構埋土と考えられる土器小片の混じる土層がみられる。この土層を切る形で、南壁に2基のピットが隣接して確認された。その内、北側のピットからは、弥生時代終末から古墳時代初頭ごろの高杯と甕片が出土した。

このように、津島岡大遺跡の西南端において旧地形の状況と弥生時代終末～古墳時代初頭をはじめとする遺構・遺物の存在が明らかとなった。（光本）

3. 総合研究棟新営雨水排水敷設工事に伴う立会調査

（津島北A X～B A06区）

a. 調査区の位置と調査の経過

本調査地点は2002年度に発掘調査を実施した津島岡大遺跡第28次調査地点（自然科学系総合研究棟）の南から東門に至る南北約120mの範囲である（図11）。周辺には西に近接して第5次調査地点（大学院自然科学研究科棟）がある。立会調査は2003年8月4日から9月2日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

b. 調査の概要

① 層序（図12）

調査地点の雨水排水設備は北から南に排水するものであり、掘削深度は南から北に向かって減ずる。したがって調査地点の北半では、掘削は中世以前に遡る土層には至っていない。

各層の時期は、共伴遺物が少なく決めがたいが、周辺の調査成果を参考に推定しておきたい⁽¹⁾。

1層は1907年（明治40年）の陸軍屯営造成以降の造成土である。2層は青灰～灰色砂質土で、明治時代の耕作土である。3層は黄褐～明黄褐色砂質土で、近世の耕作土である。4層は明灰～

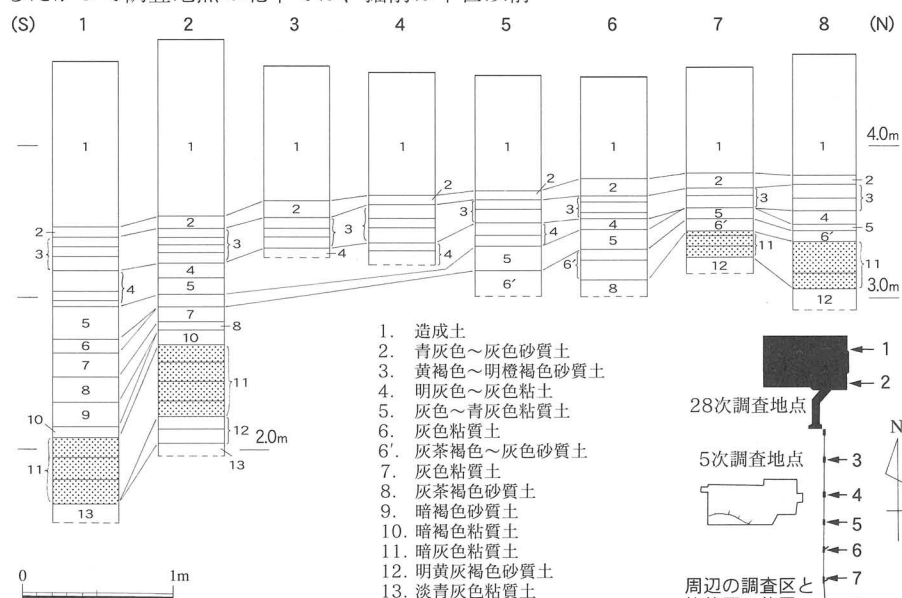


図12 土層断面柱状図（縮尺1/50）

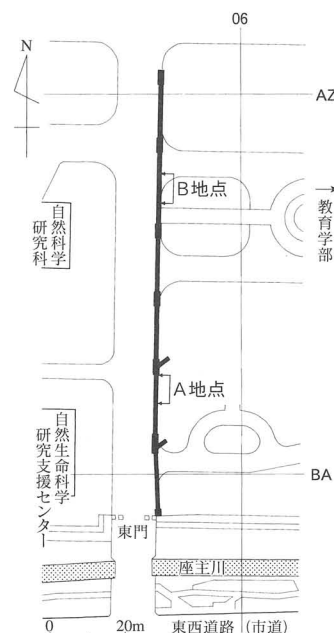


図11 調査区位置（縮尺1/2000）

灰色粘土で、中世の耕作土である。5層は灰～青灰色粘質土で、古代から中世までの耕作土と考えられる。6層は灰色粘質土、7層は灰色粘質土で、古墳時代の包含層と考えられる。8層は灰茶褐色砂質土で、弥生時代中期～後期の包含層と考えられる。9・10層は北に隣接する第28次調査地点で確認しているが、本調査範囲では確認できていない。第28次調査地点では、9層は暗褐色砂質土、10層は暗褐色粘質土で弥生時代前期に比定されている。11層は津島地区一帯に広がりをもつ、「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上面が弥生時代前期にあたる。12層は明黄灰褐色砂質土で、縄文時代後期の基盤層である。第28次調査地点では12・13層に細分される。

② 地形

今回の調査地点と第28次調査地点の成果をあわせると、津島北地区の東半で南北約180mにわたってほぼ連続した土層の堆積状況を確認できたことになる。そこでこれまでの周辺の調査成果もあわせて地形復元をしたい。

図12をみると、11、12層の標高が南北で大きく異なることに気づく。南側の柱状図7、8では、縄文時代後期の基盤層である12層上面の標高が約3.0～3.2m、上面が弥生時代前期に比定される11層では、上面の標高が約3.3～3.4mであるのに対し、北側の第28次調査地点において微高地と認識されている柱状図2の地点では12層上面の標高は約2.2m、11層上面の標高は約2.7mであり、0.7～1mの比高がある。これらの間にあたる範囲は、今回の調査範囲では掘削深度が小さく中世以前の状況については不明な点があるが、本調査地点の柱状図3～5間の西に近接する第5次発掘調査地点の調査成果⁽²⁾を参考にすると、この範囲には縄文時代後期～弥生時代前・中期までの東西方向の河道が通ると推測される。このことから、縄文時代後期～弥生時代前期までは河道を挟んで南北に標高差のある微高地が形成されていたことがうかがえる。弥生時代以降、この旧地形は反映されながらも、全体的には平坦化が進んでいく。

③ 遺構

本調査地点ではA地点の範囲で弥生時代から古代・中世までの東西方向の多数の溝群、B地点範囲で近世～近代の溝と畦畔を確認した。

A地点（図13）：弥生時代から古代・中世の東西方向の溝群である。多数の溝が約10mの範囲に切りあひながら掘削されている。本地点より西へ約150mの地点に位置する第19次発掘調査地点においても同時期の東西方向の溝が多数切り合って検出されており⁽³⁾、本調査地点の溝群と接続するものと考えられる。

B地点（図14）：近世～近代の東西方向の溝と畦畔を確認した。幅は畦畔が約1.2m、溝が約3mである。現在、大学構内を東西に貫流する座主川は条里の区画を反映していると考えられるが、この溝と座主川との心々間

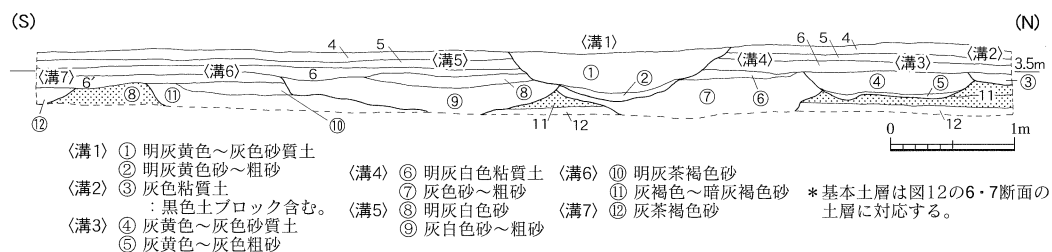


図13 A地点 溝群土層断面（縮尺1/60）

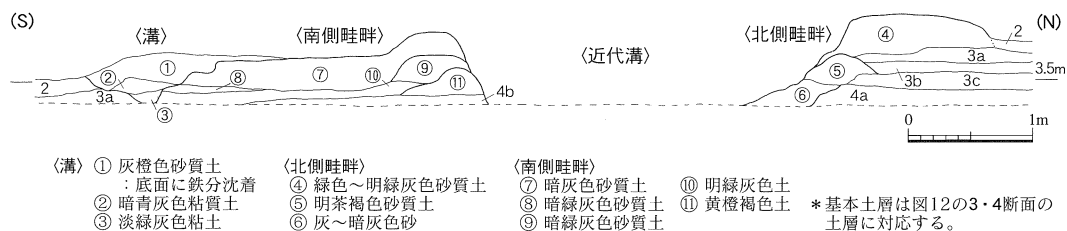


図14 B地点 遺構群土層断面（縮尺1/60）

の距離は約105mとなっており、今回検出した溝と畦畔は近世段階の条里の区画を反映した遺構の一部である可能性が高い。

c. まとめ

本調査地点では、南北約120mにわたって土層を観察できたことにより、地形復元のためのデータを得ることができた。また、近世段階の条里の区画を反映している遺構を確認できたが、このようなデータは立会調査でも得られるため、今後も丹念にデータを積み上げ、確度の高い条里地割を復元していく必要がある。（野崎）

註（1）ここでは第28次調査地点の成果を参考にした。

忽那敬三2004「津島岡大遺跡第28次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.4-6

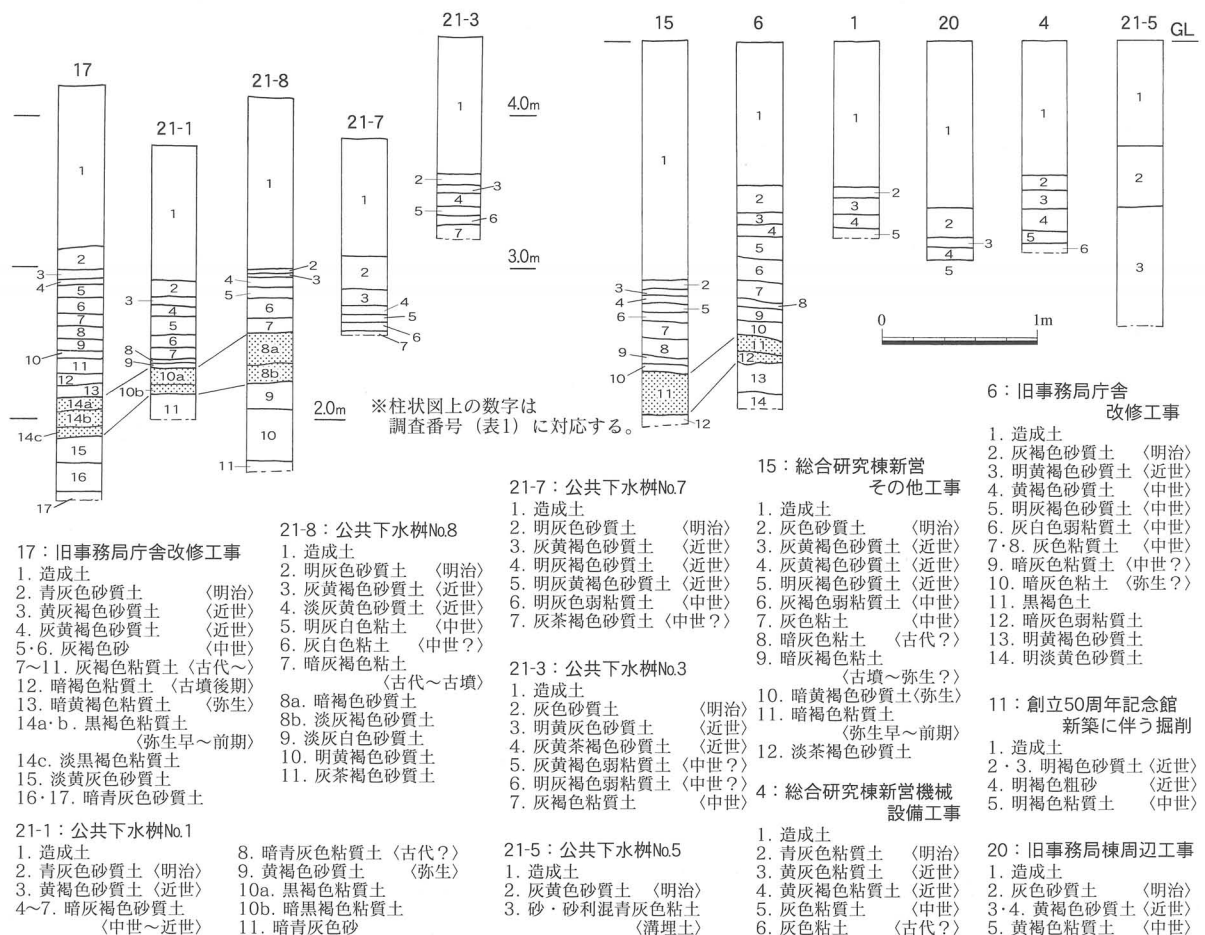
（2）阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（3）野崎貴博編2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

4. その他の立会調査

個別に取り上げなかった調査地点のうち、中世層以下の土層まで掘削が及んだ地点の土層堆積状況は図15となる。その中で、「黒色土」及び縄文時代の土層を確認した地点は、No.21-1、21-8、15、6地点である。

総合研究棟新営に伴う排水工事（No.15）では、地面から約2.5mの深さまで掘削がなされた。この地点で



は、弥生時代中期～後期頃に相当する土層から掘り込まれた溝（北東～南西方向）の一部が検出された。

公共下水桝接続工事 No. 5 区間（No.21－5）では、近代層である2層の下に、砂・砂利混じりの粘質土である3層が、現状で80cmにわたって掘り底まで堆積していた。この土層は、東西方向にのびる近世段階の溝の埋土であると考えられる。本調査地点は現在の座主川の北に隣接しているが、座主川と同様の位置関係であった津島岡大遺跡第25次調査では、中世から近世に至る東西方向の溝が確認されている⁽¹⁾。したがってこの溝は、近世段階の座主川の埋土である可能性が高いものと考えられる。
(光本)

註（1）野崎貴博2001「津島岡大遺跡第23・24・25次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』pp. 8－18 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表1 2003年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調 査 名 称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	備 考
1	立会	津島北	BB13～15	事	創立五十周年記念館新築に伴う掘削（雨水排水桝・管理設工事）	4.7・10・17 5.9	1.3	中世層まで掘削
2	立会	津島北	AY01	事	学務部テニスコート側溝設置工事	4.1	0.25	造成土内
3	立会	津島北	AZ04	教育	教育学部講義棟身障者便所取設工事（排水管理設）	4.23	1.1	近世層まで
4	立会	津島北	AX06	工	総合研究棟新営機械設備工事（ガス配管埋設工事）	5.2・9・16	1.4	古代層？まで掘削
5	立会	津島南	BC02	事	サッカー場練習板設置に伴う掘削	5.13	0.85	造成土内
6	立会	津島南	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	6.25～27 7.9・10	2.43	GL－1.9m 黒色土、GL－2.1m で縄文基盤層確認
7	立会	津島南	BB・BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工事（仮設電力・電話引き込み建柱工事）	7.28	1.7	径0.5m、GL－1.2m 前後で黒色土層、GL－1.5～1.6m 前後で縄文後期基盤層確認
8	立会	津島北	AX 06 ～ BA 06	工	総合研究棟新営その他工事（雨水排水）	8.4～9.2	1.7	標高3.3～3.4m で黒色土、弥生～古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔確認
9	立会	津島南	BF14	農	農学部鉄骨補強架構工事	8.20	0.3	造成土内
10	立会	津島北	AW01、 AX01～03	工	総合研究棟新営機械設備工事 給水（井戸水）配管埋設	8.21・22・ 28・29	1.2	近世層確認
11	立会	津島南	BD15	事	旧事務局庁舎改修その他工事（EV ビットほか）	8.21	0.8	造成土内
12	立会	津島南	BE14	農	農学部総合研究棟改修機械設備工事（既設配水管撤去・新設配水管埋設）	9.22	0.5	造成土内
13	立会	津島南	BC・BD15	農	農学部総合研究棟改修機械設備工事（ガス配管埋設）	9.24	0.9	造成土内
14	立会	津島北	AW・AX 06・07	工	総合研究棟新営電気設備工事（外灯）	9.30 11.14・18・27	1.4	中世層まで掘削
15	立会	津島北	AW・AX 06・07	工	総合研究棟新営その他工事（排水）	10.1～11.6	0.5～2.5	桝で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝確認
16	立会	津島南	BE14	事	旧事務局庁舎改修その他工事（雨水排水埋設）	10.7・8	1.4	明治層まで掘削
17	立会	津島南	BC・BD15	事	旧事務局庁舎改修機械設備工事（外部給水・消火配管）	10.14・17・19 11.7	0.8～2.75	管路は造成土内、桝で縄文基盤層確認
18	立会	津島南	BE14・15	農	農学部総合研究棟改修機械設備工事（ガス配管埋設工事）	10.29	1.17	造成土内
19	立会	津島南	BC・BD 15・16	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事（ハンドホール埋設、ボックスカルバート、外灯設置）	10.31	1.4	ボックスカルバート、外灯地点は近世層まで掘削
20	立会	津島南	BD15	事	旧事務局棟周辺外灯設置工事	11.12	1.45	中世層まで掘削
21-1	立会	津島南	BG・BH13	事	公共下水桝接続工事 No. 1 区間 農学部合併処理槽	12.22 ～04.2.27	1.8	縄文基盤層まで掘削
21-2	立会	津島南	BE～BG10		No. 2 区間 体育館東～武道場西		1.95～2.25	桝で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑確認
21-3	立会	津島南	BG07・08		No. 3 区間 学生 BOX 西		1.4	中世層まで掘削
21-4	立会	津島北	AZ16		No. 4 区間 文・法・経2号館西		2.45	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認
21-5	立会	津島北	BA10		No. 5 区間 理学部		1.9	中世頃の座主川を確認
21-6	立会	津島南	BG22		No. 6 区間 農学部4号館東		1.5～1.9	縄文基盤層まで掘削、弥生～古墳初頭ビット、近代畦畔状遺構確認
21-7	立会	津島南	BI16		No. 7 区間 津島宿泊所		1.15～1.3	中世層まで掘削
21-8	立会	津島南	BI15		No. 8 区間 南宿舍		2.0～2.45	縄文基盤層まで掘削
21-9	立会	津島北	AT11		No. 9 区間 職員宿舍		1.2	近世層まで掘削
22	立会	津島北	AZ00 BA02	教育	教育学部美術工芸及養護教諭棟四阿設置工事	04.1.13	0.5	造成土内
23	立会	津島南	BB10	保	保健管理センター増築その他工事	04.2.18	0.6	既設埋土
24	立会	津島北	AU14・15	文法経	文・法・経テニスコートフェンス新設工事	04.2.27	0.9	造成土内

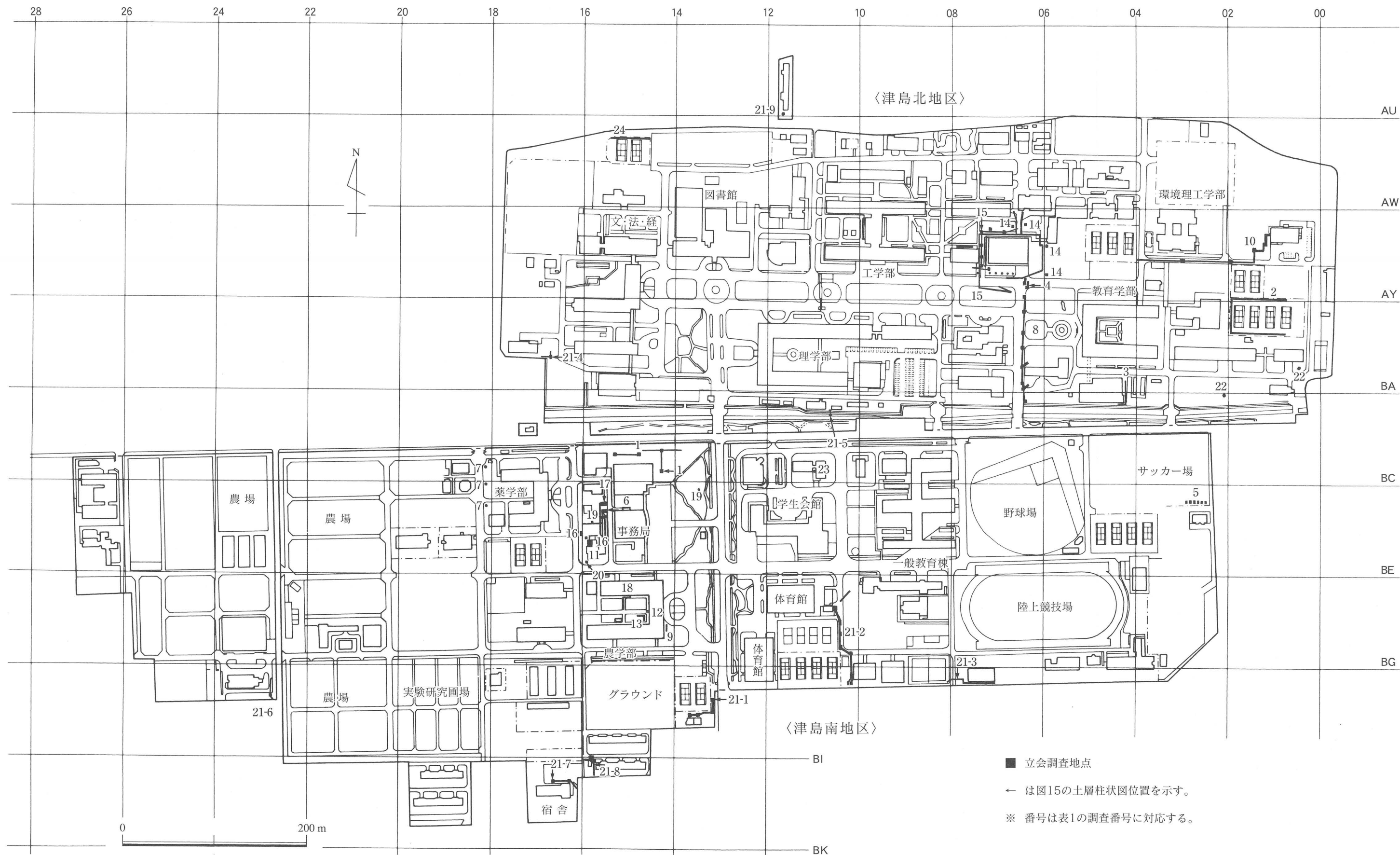


図16 2003年度の調査地点【1】—津島地区（縮尺1/4000）

第2節 津島岡大遺跡の研究

1. 縄文時代後期の集落構造とその推移

山本 悦世

津島岡大遺跡は、東西1.4km、南北0.8kmに広がる岡山大学津島キャンパスの敷地のなかに、これまでに大小あわせて29ヶ所におよぶ発掘調査が実施され、確認調査あるいは工事に際した立会調査の成果も含めると、遺跡全体の状況にある程度理解できる段階に至っている。また、同遺跡の南側では約1.5kmの距離に位置する津島遺跡や周辺遺跡、北側に隣接する朝寝鼻貝塚などの調査成果も報告されており、津島岡大遺跡の範囲内にとどまらず、岡山平野西岸域の状況を広く読み取ることができる。

ここでは、同遺跡の全体像を整理することによって、縄文時代後期における集落構造の一端を明らかにしたい。

(1) 津島岡大遺跡における集落の実態

津島岡大遺跡の内容は、これまでに計14冊の発掘調査報告書あるいは年報・紀要において報告されている⁽¹⁾。報告にあたっては、縄文時代後期の集落構造と生業との関係を念頭においた論考⁽²⁾のほか、居住域での石器出土状況⁽³⁾や炉の問題⁽⁴⁾から具体的な利用内容の解明が試みられてきた。

ここでは、遺構・遺物のあり方から各調査地点を類型化し、地形と空間利用の関係を模式的に捉えることで、最も資料が豊富な後期前葉における集落構造の特徴を描き出し、その後の推移も合わせて考えることとする。

a. 縄文時代後期における地形復元

津島岡大遺跡は、岡山平野中央部を南流する旭川西岸に位置する。遺跡の北側には半田山丘陵が迫り、南側に張り出す尾根から北側に大きく入り込む谷部の前面に、丘陵裾から平野部にかけての立地が認められる（図17）

遺跡内には、東側に位置する旭川からの水流が半田山丘陵下端を巡って遺跡内に流れ込み、中心的な河道を形成するほか、背後の谷部からの流路が遺跡の北側周辺における谷地形形成に影響していることは、現状の地形や水路からも容易に理解できる（図17・18）。特に注目されるのは、遺跡の中央部を走る河道Aである（図18）。同河道は、第3・15次調査、第5次調査、第23次調査の3地点における調査から、微高地との比高差や規模、あるいは急峻な斜面形成や埋土から予想される水量の多さなどの点で、他の低地部とは明らかに異なる状況が共通しており、遺跡のほぼ中央を北東から南西に向けて蛇行しながら走る中心的な河道と評価される。その他に、北東から南西方向に並ぶ各地点（第19次調査、第10次調査、第14次調査、第26次調査）において、砂礫などの基盤層の高まりが連続的に認められることから、河道Aの南側に第26次調査地点に続く河道Bの存在が予想される。一方、遺跡の北側部分には、比高差が小

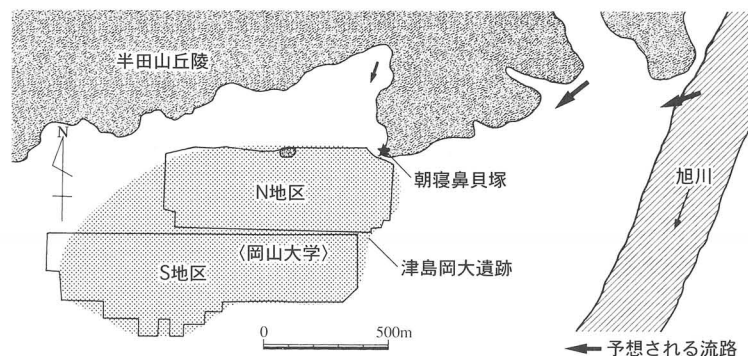


図17 津島岡大遺跡の位置と周辺環境

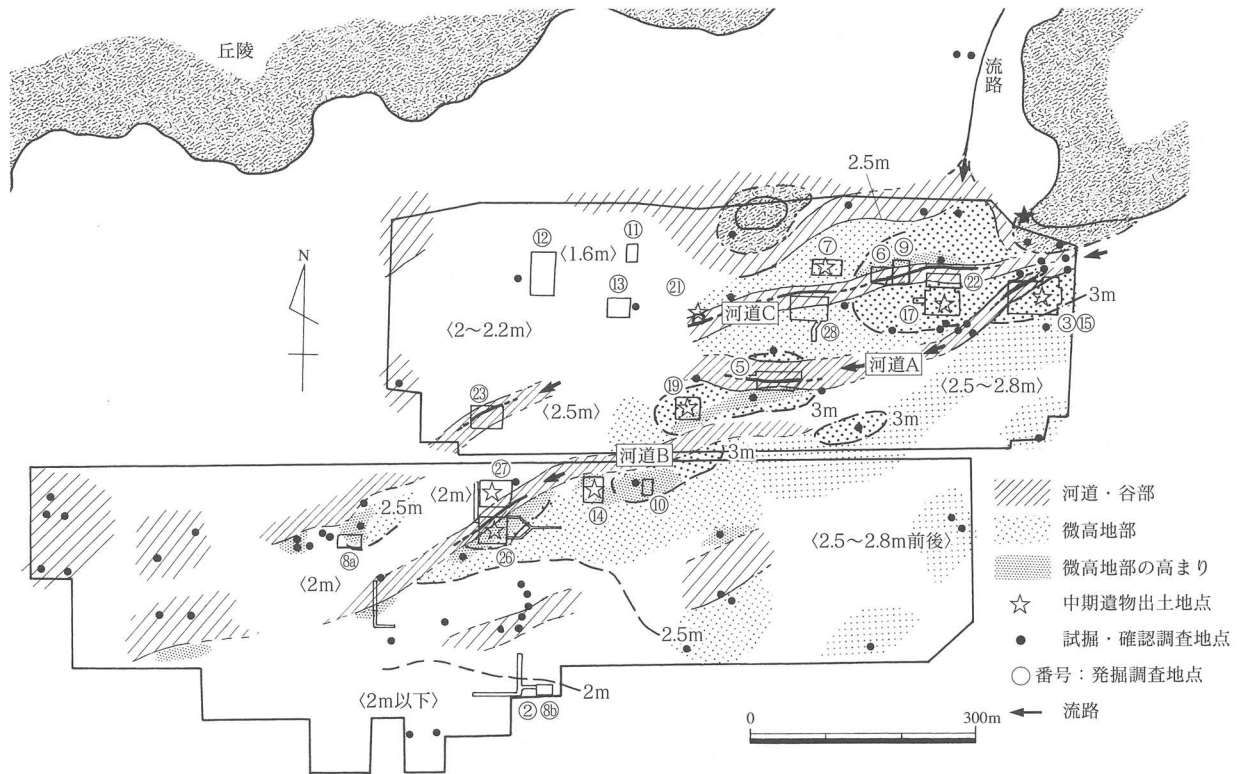


図18 津島岡大遺跡における地形復元と調査地点

さく緩やかな起伏に富み、流路部があまり明確ではない谷地形の河道C（図18）が広がり、蛇行しつつ第13次・12次調査区を経て遺跡の背後にあたる北西部に続く可能性を有する。

縄文時代に対応する土層面の標高値を確認すると、遺跡北東端に位置する尾根付近が最も高く、標高3m以上を示す。同数値を示す地点は、河道Aあるいは河道Bの縁辺に限定される傾向が強い。各調査地点の位置関係からまとまりを考えると、第3・15・17・22・6・9次調査地点、第5・19次調査地点、第10次調査地点の3カ所に高位部があげられる。それぞれの周縁には標高2.8~2.5m（第7次調査）、さらにその外側には同2m前後の範囲が確認される。このレベルまで下がるのは遺跡の北西域あるいは南西域である。全体としては北東から南西への傾斜を示すが、細部にわたる地形形成に北東端の尾根の存在や河道A・Bの影響が関わっていることが予想される。

大小の河川が網の目状に走り、その中に微高地が点在する状況というよりは、中心的な河道とその周辺に形成された自然堤防状の高まりを核とした微高地の存在が特徴的である。また、微高地は、北側の丘陵に近い部分では、その範囲は広く安定的であり、南側に向けて、その広がりには狭小で点的となる様子が見え隠れする。

こうした地形は、縄文時代中期後半には、ある程度出現していたことが、僅少ではあるが各地点で出土する中期土器の存在から予想される。その後、谷部は後期段階に埋没し比高差を減少するが、弥生時代前期まで大きな変化を認めることはできない。

b. 集落構造の復元

津島岡大遺跡における発掘調査地点の内容（表2）をもとに、各地点の類型化を行って全体像を考えよう。

i) 類型化の基準

類型化するにあたっては、遺構の分布と遺物の出土状況に注目して基準を設定した（表3~5）。

表2 津島岡大遺跡調査概要一覧

*:発掘調査報告書未刊

調査次	面積 (㎡)	時 期		地 形			微 高 地 部										谷 部 ・ 河 道 部				遺 物
		後 期 前葉	中葉	弥生 早期	微高地	微高地 一谷部	◎河道部 ○谷部	住居状 遺 構	土坑・ピット	溝	そ の 他	炉	火処	焼土・ 炭集中・ 土坑・ ピット	貯蔵穴	土坑・ ピット	焼土 土坑	その他			
3・15	2600	○	△		○	△	◎	1	1・557		サヌカイト集石1		5	1・6	17	0・1			◎		
				○	○	○	◎								11	0・10			◎		
17*	1451	○	△		○			1	7(大)・ 約900	数条				7・0					◎		
22*	774	○			○	○			1・10数基										○		
				△	○	○										1			△		
6・9	1250	○			◎~○	○	○		0・7	1				1・0	23	3・8	1		◎		
28*	1798	○			○	○			3・140										△		
21	30	○				?												溝?	○		
11	640	○			○				4・26			1	1						V		
13	816	○			○				0・88				2						V		
12	1472	○?			○				20・8				4						V		
23*	1339	○			◎~○	○	◎											杭列	△		
				△	◎~○	○	◎								数基				△		
27		○			○	○			3・13				3	2					△		
26*	1550	○			◎~○	○	○~◎		7・0	1?			3	2					△		
				△	◎~○	○	○		9(大)・0						4				V		
8 a	650	○							4・8					6・0					V		
14	856	○			◎~○				1・0										V		
5	1537		○		◎~○		◎									7			◎		
				△	◎~○		◎								3				V		
19	1019	◎	◎		◎~○				4・155	2?		2		2・2					△		
7	800		○		○				0・642			2		0・13					V		
2・8 b	681			○	○														○		

表3 遺構分布状況からの類型基準

類型	基 準
A	微高地上に多数の遺構（ピットでは数100基）がある。 遺構の種類が複数である（加熱遺構が含まれる場合もあり）。 ①明確な住居あるいは大形遺構が含まれる。 ②大形遺構は明確ではなく数は少ない。
B	低湿地型の貯蔵穴が存在する。 ①群集する（10基前後以上） ②数基（5基以下）のみ。
C	加熱遺構が主体で、特徴をなす。 ①炉が確認される。 ②焼土・炭化物などの集中があり、加熱痕跡を残す。
D	加熱遺構は無いが、微高地上にピット・土坑が多少認められる。
E	明確な遺構は認められない。
F	特殊な遺構が認められる。

表5 各調査地点の類型表

調査次	縄文時代後期		弥生時代早期	縄文後期面 標高 (m)
	後期前葉	後期中葉		
3・15	B①I b・A②III a	—	B①I b	3 m前後~1.3m
17*	A①I a	—	—	3 m+
22*	E II b	—	E III b	3~2.8m
6・9	B①I b・A②IV a	—	—	3 m前後~1.4m
21	E III b	—	—	2 m前後
28*	D III a - b	—	—	2.5~2.2m
11	C①IV a	—	—	2~1.8m
13	C②IV a	—	—	2.2m前後~1.7m
12	C②IV a	—	—	2.2~1.6m
23*	F III b	—	B②III b	2.5m前後~0.8m
27	C①III a	—	—	2.2~1.5m
26*	C①III b	—	D IV a・B②IV b	2.6~1.6m
8 a	C②IV a	—	—	2.8~2.5m
14	D IV a	—	—	2.5~2.4m
5	—	B①I b	B②III b	3~1 m
19	(C①III a)	C①III a	—	3~2.3m
7	(C①IV a)	C①IV a	—	2.8~2.4m
2・8 b	—	—	E II a	2 m前後

表4 遺物(土器)出土状況からの類型基準

類型	遺 物 量 (1箱=約28ℓ)	
	表2-記号	基 準
I	◎	10箱以上。集中的出土。
II	○	2~9箱。比較的集中的に出土。
III	△	0.5~1箱程度。分散的に出土。
IV	V	0.4箱以下。分散的に出土。

遺物の集中的な出土域	
a	微高地部
b	河道・谷部

〈遺構〉

A類：大形遺構を含み、遺構数も多く複合的な構成を示す。居住域の要素の強い類型である。

B類：低湿地型の貯蔵穴が検出される場合であり、貯蔵域としての評価が可能である。

C類：遺構の中で加熱関連遺構が特徴となる類型である。加熱活動域と評価される。

D類：小形の土坑やピットが多少検出されるが、活動の内容を積極的に示す遺構に乏しい類型である。

E類：明確な遺構は認められず、空間利用が極めて低調な状態を示す。

F類：他の地点には例がなく、利用状況の特徴付ける特殊な遺構が認められる場合を示す。

D・E類は利用頻度が低い地域を示し、両者の差は大きくはない。また、E類に関しては、各調査地点において、縄文土器あるいは実帯文土器の細~小片が数点出土

する状況にあるため、その空間利用を考える上では遺物が一定量出土している場合、つまり、Ⅰ～Ⅲ類に当てはまるもののみを対象とした。

〈遺物〉

出土量からⅠ類～Ⅳ類、出土位置によってa・b類にそれぞれ分類した。遺物量が多いと評価されるのはⅠ・Ⅱ類である。量の多さから考えて、利用場所との強い関係が予想される。Ⅲ・Ⅳ類は非常に少ない状態と言える。こうした遺物量に関しては、調査面積との関係が問題となることは当然であるが、ここでは、曖昧ではあるが、出土状況を加味することで各地点の傾向として示した。

ii) 類型の相関関係からみた集落の特徴

前項で想定した類型の相関関係をみると、時期によってその状況に違いが認められる（表6）。

後期では、類型間の相関関係の強さと類型数の多さが特徴である。相関関係では、多量の遺物量を示すⅠ類はA①類・B①類と関係が強く、その他の類型は遺物量が少量～僅少のⅢ類あるいはⅣ類となり、遺構密度が高いほど遺物量が多いという明快な関係を示す。その中で、E類でありながら遺物量の多いⅡ類を示す第22次調査地点は、第17次調査地点に接する位置にあることが、遺物量の多さを生んでいる要因であると予想され、第17次調査地点の端部として同一の空間域に含まれると判断される。B類については、B①Ⅰb類に集約される点が注目される。また、全体に類型数の多い傾向の中で、Ⅰ類の数の少なさは際だつ。そこには居住域あるいは土器使用の作業空間の存在が明確な形で他と区分されていることが読みとれる。

以上の状況から、縄文時代後期では、遺構・遺物は広範囲に広がるのではなく、活動内容によってポイント的に集中するというシンプルで明確な空間利用形態の存在が指摘される。

弥生時代早期では、類型の減少と遺構・遺物の希薄化が特徴である。類型は、A類・C類・F類が姿を消し、明確な遺構としてはB類のみと言っても過言ではない状況を呈する。さらに、B類は細分化を示し、B②Ⅲ・Ⅳ類の出現と地点の増加が注目される。ここにも、遺構・遺物の減少化傾向が強く表出されている。こうした状況から浮かび上がる集落には、居住域や加熱活動域の姿はなく、貯蔵域のみが点在することとなる。貯蔵域は、従来型のもの（第3・15次調査地点）に加え、遺物をほとんど共伴しない数基の貯蔵穴が分散的に点在する（第5次調査他3地点）という新たな動きを見せる。その他にはEⅡ類の出現があげられる。遺構は確認できないで遺物のみが出土する状況で、具体的な利用上の評価は困難であるが、注意しなければならない。

iii) 類型分布と空間利用の推移

各類型が遺跡内において、どのような位置に分布するかを平面的に確認し（図19・20）、集落内での空間利用状況から時期的な特徴を抽出した上で、時間的流れを見てみよう。

縄文時代後期前葉（図19）

居住域を表すA類・B類は遺跡の北東部に限定される（第3・15次調査、第17・22次調査、第6・9次調

表6 類型の相関関係

a. 縄文時代後期

類	A①	A②	B①	B②	C①	C②	D	E	F
Ⅰ	1 地点 (17次)		3 地点 (3/15次, 6/9次, 5次)						
Ⅱ								1 地点 (22次)	
Ⅲ		1 地点 (3/15次)			1 地点 (27/26次)		1 地点 (28次)	1 地点 (21次)	1 地点 (23次)
Ⅳ		1 地点 ? (6/9次)			2 地点 (11次, 7次)	3 地点 (13次, 12次, 8a次)	1 地点 (14次)	○	

b. 弥生時代早期

類	A①	A②	B①	B②	C①	C②	D	E	F
Ⅰ			1 地点 (3/15次)						
Ⅱ								1 地点 (2/8 b次)	
Ⅲ				2 地点 (5次, 23次)				1 地点 (22次)	
Ⅳ				1 地点 (26次)			1 地点 (26次)	○	

査)。そして、北東部に位置する丘陵裾部には朝寝鼻貝塚が広がる⁽⁵⁾ (図19)。同地域は標高3mを超える最も安定した広がり確保される場所であり (図18)、さらに、水量の豊富な河道Aの北側に位置することから、比較的洪水等の被害も被り難い地域と判断される。そこには、居住域の選択基準を窺うことができる。

居住域 (A類) を詳しく分析すると、中心をなすA

①I a類は第17次調査地点

というさらに狭い範囲に限定される。貯蔵域はA①I a類を中心としA②Ⅲ・Ⅳ類が周囲を取り巻く居住域内の河道部 (第3・15次、第6・9次調査) に形成されている。貯蔵穴は群集し多数の遺物を伴うことから、日常的に管理され盛んに利用される重要な遺構であったことが予想される。貯蔵穴の機能を考える上でも、居住域との位置関係や貯蔵穴数の問題、遺物との関連性などは注目されることである。集落内で、まとまった量の遺物が出土する地点は極めて限定的であり、A①類とB①類との結びつきが非常に強い傾向を示すことは前述したが、そうした状況から、遺物の利用あるいは廃棄が、それぞれの遺構と密接に関わった行為に伴って近辺で行われていたことは容易に想定できる。とすると、B①類の遺物は貯蔵穴の機能、つまり、堅果類の加工作業に伴った遺物である可能性は非常に高いと判断される。居住域周辺での管理、貯蔵域内での加工作業の実施が、本時期における貯蔵域にみる特徴である。

加熱活動域を示すC類の位置は、標高1.6~2.2mを測る。集落の北西部あるいは南西部に認められる。いずれも居住域よりはかなり低く、面積もさほど広くはない微高地が選地されている。炉を有する①類は3地点で確認されているが、確実に前葉とされるのは、集落端部に位置する第11次調査地点と第27次調査地点周辺である。この2地点では①類周辺に②類が認められており、少なくとも、北西部と南西側部の集落端部には、炉を中心とし一定の広がりを持つ加熱活動域の存在が想定される。ここで問題となる活動内容である⁽⁴⁾が、遺物の出土状態から貯蔵穴とは全く異なる行為であることは言えても、残念ながらそれ以上の決め手には乏しい。現状では集落域の端部に位置する傾向が一つの手がかりになるかもしれないが、今後の検討課題である。

D類に関しては点散的な分布が認められる (第22次・28次・14次調査地点)。A類域に近い位置ほど遺物量が多くなる傾向があることや遺構の希薄性から考えて、同類型地点で出土する遺物は周辺からの流れ込みであり、利用頻度は極めて低い地点であると判断される。このように、居住域近辺においても積極的に遺構を構築するような利用がなされない空間が、集落内の随所に点在する要因の一つには、安定しない地形があげられるかもしれない。

遺跡の南東域では、一定の面積が確保される調査が非常に少ない点は問題であるが、地形や確認調査に関する現状のデータからは全体に内容は希薄であった可能性が考えられる。

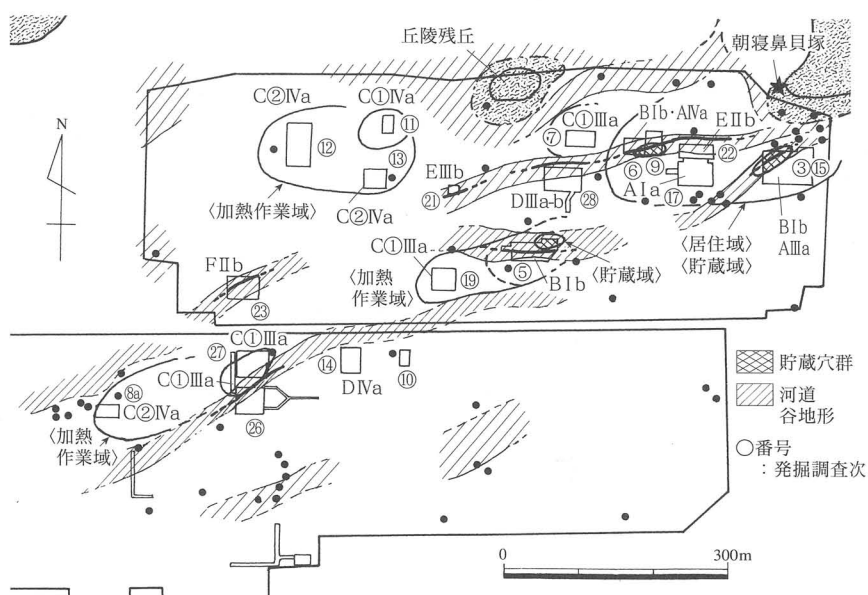


図19 各調査地点の類型化と空間利用 1—縄文時代後期—

縄文時代後期中葉 (図19)

B①I b類が第5次調査地点に、C①Ⅲ a類が第19調査地点に、C①Ⅳ a類が第7次調査地点に認められるが、前段階に比べると、同時期の遺構数は少なく分布範囲も狭い傾向が示される。ところで、C類とした第19次調査地点は第5次調査地点にごく近い位置にある。標高は同じく3mを測り、遺構数は他のC類と比較すると際だって数が多い。こうした状況は、第3・15次調査地点の状態に近いことから、河道部にあたる第5

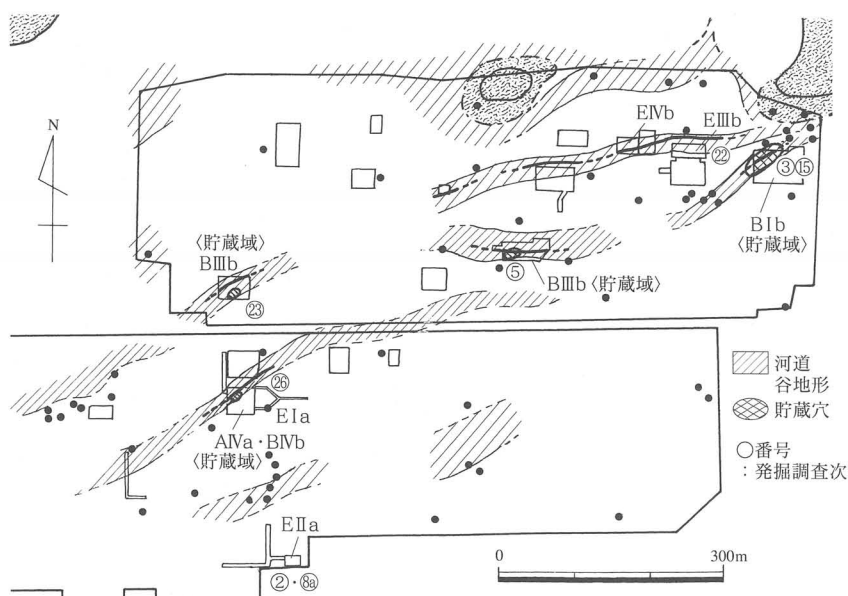


図20 各調査地点の類型化と空間利用 2-弥生時代早期一

次調査地点および第19次調査地点を含めた範囲には居住域の可能性を考えることもできよう。こうした点から、後期前葉から中葉にかけて居住域の若干の移動は起きたかもしれないが、類型の相関関係にも変化はなく、基本的には同様の状態が継続していたと判断される。

弥生時代早期

空間利用を示すのは貯蔵域B類のみである。それ以外は姿を消しており、複数の類型によって構成される縄文時代後期とは大きな違いを示す(図20)。利用場所についても、縄文時代後期における中心的居住域(第17次調査)は利用されていないのに対して、前段階まではほとんど痕跡を残していない遺跡南部にあたる第26次・2次・8 b次調査地点では出土遺物が多い(Ⅱ類)ことも大きく異なっている。さらに、貯蔵域に関しても、従来の地点に加えて、遺跡の南より新たな分布域を見せる点が注目される。それらは、貯蔵穴数が少ない②類あるいは遺物を伴わないⅢ・Ⅳ類であり、縄文時代後期のB①I b類とは明らかな違いを示す。

このように、貯蔵域が点在するのみで、土地利用の中心がやや南に移動するという本時期の集落構造には、縄文時代後期とは大きな変化を見ることができる。

c. 各時期の特徴とその背景

前項で整理した類型分布あるいは推移を念頭に置いて、各時期の特徴をまとめたい。

縄文時代後期

集落の立地は、丘陵下端部から遺跡中央部を流れる河道の自然堤防状の高まりを中心とした範囲が選ばれ、集落は限定された居住域と周辺に広がる加熱活動域で構成される。居住域内には貯蔵域が取り込まれている。

居住域は、標高が高く面積が確保された安定的な微高地が選択され、2～3棟の竪穴住居と大形土坑、ピット群、溝などの遺構群に加え、大量の遺物を包含している。近辺には貝塚も形成される。貯蔵域は、その機能が保たれる地形や居住域との位置を考慮しつつ、効果的な利用を意識した河道あるいは谷部の選地が窺われる。炉を中心とした加熱活動域は、やや低くて面積はさほど広くない微高地が利用されており、集落の端に広がる傾向が認められるが、遺物は非常に希薄であり、加熱関連遺構以外の遺構はほとんど認められない場合が多い。

中葉段階には、遺構・遺物の出土量がやや少なくなり、集落の中心は若干移動する。不明確な点もあるが、集

落構造などには変化を示さない可能性が高い。

弥生時代早期

縄文時代後期の集落とは構造面に大きな変化を見せる。最も特徴的な変化は、居住域・加熱活動域の消失である。貯蔵域に関しても、居住域と分離して分散的に置かれる点やその立地が、従来希薄であった南側に中心が移動し、遺物をほとんど伴わず数基で構成される点などにも新たな傾向が現れる。こうした居住域との分離は管理面での低下を考えさせる。さらに、遺物をほとんど共伴しない点からは、加工作業についても、後期に認められた集中的で定期的な加工作業の想定は困難であり、そこには堅果類に対する生業面での重要性の低下を感じざるを得ない。貯蔵穴や遺物出土地点に窺われる集落の南側への移動は、活動域が平野部へ進出する傾向の現れと理解されるが、縄文時代に利用されていた微高地部には、なぜ遺構が残されていないのか。続く弥生時代前期では微高地上には水田畦畔が形成される。こうした変化の中にその理由が求められるであろう。

(2) 周辺遺跡の状況

① 百間川沢田遺跡⁽⁶⁾

岡山県南部の岡山平野に位置する。津島岡大遺跡とは旭川を挟んで対峙する位置に当たる。四元調査区において、縄文時代後期中葉の遺構・遺物がまとまって出土した。丘陵下端の微高地から斜面部に、貯蔵穴3基を含む土坑8基・炉7基・貝塚、そして多量の出土遺物が報告されている。土坑の形態や立地からその大半は貯蔵穴の可能性が高いと考え、B①類の地点と評価される。また、多量の遺物と炉の存在あるいは貝塚などからは、AⅠ類とも結びつくこととなり、居住域と貯蔵域との密接な位置関係が想定される。

弥生時代早期（報告書では縄文時代晩期後葉）では、同遺跡の高縄手調査区あるいは百間川原尾島遺跡において遺構・遺物が確認されている。遺構は土坑程度で貯蔵穴は検出されておらず全体に希薄である。いずれの地点も平野部にあたり、丘陵裾部の四元調査区とはやや異なる立地を認めることができる。

縄文時代後期集落の状況や弥生時代早期における貯蔵穴の減少や平野部への移動・出土地点の増加などに、津島岡大遺跡と共通した動きを見ることができる。

② 久田原遺跡⁽⁷⁾

岡山県北部の山間部に位置する。山塊の裾部、谷口の比較的平坦な地形に立地する。山塊の反対側に当たる西側には、隣接して河川が流れる。遺跡は縄文時代後期中葉、晩期中葉、弥生時代早期（報告書では晩期後葉）の3段階の時期が確認されている。

縄文時代後期は機能が明らかな遺構が少ないため、晩期に注目しよう。晩期中葉では、堅穴住居3棟と河道内に袋状土坑（貯蔵穴）14基が確認されている。その他に晩期として焼成土坑5基、ピット多数、火処が報告され、出土遺物も多い。類型化すると、A①Ⅰ類・B①Ⅰ類、そしてC①類で構成されることとなり、居住域・貯蔵域・加熱活動域を有する集落となる。弥生時代早期（晩期後葉）では、堅穴住居1棟とピット群が報告され、貯蔵穴は確認されていない。河道部は埋没し平坦化が進んでおり、地形や集落構造に変化が認められる。

このように、晩期中葉の集落構造や弥生時代早期（晩期後葉）での変化は、津島岡大遺跡などと共通する状況であることを指摘しておこう。

(3) 縄文時代後期以降の集落動向と生業

津島岡大遺跡に認められる縄文時代後期集落の動向は、岡山県南部あるいは北部地域の後・晩期集落においても確認することができる。縄文時代後期は遺跡の立地変化や遺跡数の増加などに、大きな変化が認められる時期

表7 低湿地型貯蔵穴一覧（岡山県）

遺 跡 名	所 在 地	後 期 前 葉	後 期 中 葉	晩 期 中 葉	弥 生 早 期
津島岡大遺跡	岡山市（県南部）	40基（2地点）	7基（1地点）		15基 + α （4地点）
百間川沢田遺跡	岡山市（県南部）		3基（他に土坑4基）		
南方前池遺跡	山陽町（県南部）			8基	
菅生小学校裏山遺跡	倉敷市（県南部）			12基	
舟津原遺跡	倉敷市（県南部）			3基	
久田原遺跡	奥津町（県北部）			14基	
宮の前遺跡	落合町（県北部）			41基	

である。同時期に平野部や扇状地を中心に展開する集落には、津島岡大遺跡に代表されるような、貯蔵域を形成し明確な空間利用形態を示す場合があり（表7）、新たな集落構造が生み出されていく様子を窺うことができる。こうした動向の背景の一つに生業の問題があることは、前期・中期における海産資源への傾斜が、後期以降、植物資源へと転換していく様子の一端を示す貯蔵穴の急増などからも読み取ることができる⁽⁸⁾。岡山県下では、貯蔵穴B①類を示す遺跡は、縄文時代後期前葉に始まり、その多くが晩期中葉に属する。こうして成立する生業形態は、石器組成など様々な点から堅果類の他、狩猟・漁労・農耕などがバランスのとれた形で構成することが予想される。

しかし、その貯蔵穴群も、最終段階まで残る津島岡大遺跡においても、水田遺構の形成時期前にはB②類として生業内での比重を低下させ、弥生時代前期⁽⁹⁾にはほとんど姿を消していく。その弥生時代早期段階には、生業面で貯蔵穴への傾斜が影を潜めるなかで、集落構造にも大きな変化が認められる。津島岡大遺跡では次の段階には水田畦畔が広範囲に覆うことを考慮すると、弥生時代早期段階に、生業の転換が起きていた可能性を指摘しておきたい。

註（1）津島岡大遺跡に関する文献は付表4・5にあげている。以下に述べる各調査地点の内容は、各報告書および年報・紀要を参考としている。

（2）富樫孝志1995「縄文時代後期～晩期における津島岡大遺跡の構造」『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（3）忽那敬三2004「石器組成からみた縄文時代後期集落の空間利用」『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（4）高田浩司2003「津島岡大遺跡における縄文時代後期の炉」『津島岡大遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（5）富岡直人1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2

（6）平井勝1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県古代吉備文化財センター

（7）弘田和司2004『久田原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会

（8）註（1）（6）（7）

岡山県教育委員会1976「宮の前遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12

下澤公明1988『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 岡山県教育委員会

中野雅美1993「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81 岡山県教育委員会

近藤義郎1995『南方前池遺跡』岡山県山陽町教育委員会

（9）第19次調査において、弥生時代前期に属する貯蔵穴が報告されている。

岩崎志保他2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2章 鹿田遺跡の調査研究

本年度は2件の発掘調査と12件の立会調査を行った（図33・表8）。発掘調査は、医学部附属病院病棟建設に伴う第14次調査と医学部総合教育研究棟建設（2002年度第13次調査実施地点）にあたっての外構工事に伴う第15次調査である。病棟建設に関連した調査は、1998年（平成10年）度以降、第9～12次調査として進めており、今回は5回目となる。立会調査は、こうした両棟建設に関しての周辺整備工事が主体を占めている。（山本）

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第14次調査（医学部附属病院病棟2期、鹿田CD～CK12区、CD～CL13区、CD～CM14～20区）

a. 調査の成果

本調査では附属病院病棟新営予定地の1330m²余を調査した。その結果、弥生時代後期以降、近世に至るまでの各時期において、耕作地あるいは集落に関連する遺構・遺物を検出した。これまでの周辺調査地点での成果も併せ、鹿田遺跡の南部における時期別の概観を以下に述べる。

近世には、この一帯は耕作地として利用されたものと考えられる。主要な水路となる東西方向の溝を中心に、規格的な用水路が東西・南北につくられ、その一方でため池状遺構のような特異な遺構が営まれている。

鎌倉時代末から室町時代には、大型の溝で区画された屋敷地の存在が窺える。第9・11次調査の成果もあわせると、およそ35～70m毎に南北方向の溝がつくられ、東西方向の溝と併せて、大溝で区画された中に井戸・柱穴等が確認される状況である。その区画内でも、大まかには北側に建物、南側に耕作地といった土地利用形態に違いが認められる。

平安時代末から鎌倉時代にかけても、井戸の存在などから調査区の北西部に集落が存在することは確実である。

古墳時代以前となると、遺構・遺物ともに希薄な様相を示すようになり、この点は隣接する第9・11次調査地点とも共通する。溝・畦畔等の状況から弥生時代後期～古墳時代には本調査地点付近は主に耕作地として利用されていたことが窺え、同時期の集落は既調査地点の状況からは現在の外来診療棟付近に求めることができる。

調査期間：2003（平成15）年7月31日～12月17日

調査面積：1331m²

調査担当：岩崎志保（主任）、高田浩司、横田美香、野崎貴博

主な遺構・遺物：近世～近代の畦畔・溝4条・土坑10基・ため池状遺構1・陶磁器・瓦・漆椀、平安時代後半～室町時代の井戸10基・土坑5基・柱穴群・溝・土師質土器・白磁・青磁・木簡・櫛、弥生時代後期～古墳時代の畦畔・溝・土器集中箇所4箇所

b. 調査の経過

2003年7月17日より造成土取りを開始し、同7月31日より発掘調査を開始した。調査では近世から弥生時代までの遺構を確認し、12月17日に発掘調査を終了した。また10月18日には現地説明会を開催し、同日より10月24日

までの一週間、病棟内の一部を使用してパネル展示会を実施した。現地説明会当日には約200名、パネル展示会期間を合計すると約370名の見学者を得た。

c. 調査の概要

① 調査地点の位置 (図21)

本調査地点は、附属病院南病棟の東隣接地であり、調査以前は駐車場として利用されていた。

② 層序 (図22)

1層：造成土である。現地表面の標高は2.5～2.7mである。

2層：灰色砂質土で近代の耕作土である。3区では堆積が認められず、部分的に削平されている。上面の標高1.3～1.5mである。

3層：淡灰色～灰白色砂質土であり、上下2層に細分できるところもある。近世の耕作土と考えられる。調査区北側では堆積が見られない。上面の標高は1.3～1.5mである。

4層：淡灰褐色～緑灰色の砂質土である。中世の包含層である。上面の標高1.2～1.4mである。上下2層に細分できるところもあり、それぞれが遺構面である。上層の4a層は削平を受けているため、調査区の大半では残っておらず、部分的に確認されるのみである。4b層はほぼ全域に堆積しており、上面で井戸・溝等の中世の遺構を多数確認した。

5層：暗緑灰色～灰褐色粘質土で、中世の包含層である。調査区北側では2層に細分できる。上面標高1.05～1.15mである。5層でも中世の遺構を確認した。また3区では6層上面に洪水砂と考えられる黄褐色砂質土（5'層）が部分的に認められる。

6層：灰褐色～茶褐色の粘質土である。上面では中世のピット等を確認しているが、6層自体は古墳時代の包含層と考えられる。上面の標高0.9～1.05mである。

7層：黄褐色砂質土である。弥生時代後期～古墳時代の包含層である。上面の標高は0.7～0.9mである。部分的には2層に細分できるところがあり、上層の7a層は比較的砂質が強く、下層の7b層は粘質が強く、耕作土の可能性が考えられる。

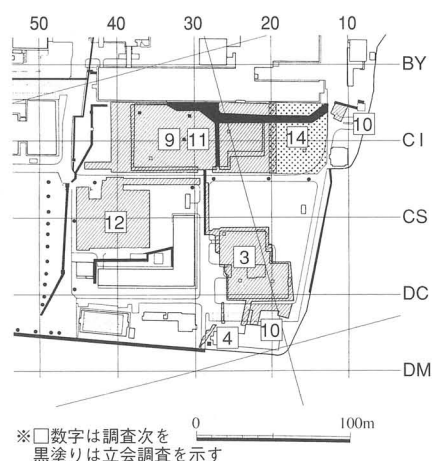


図21 第14次調査地点位置 (縮尺 1/5000)

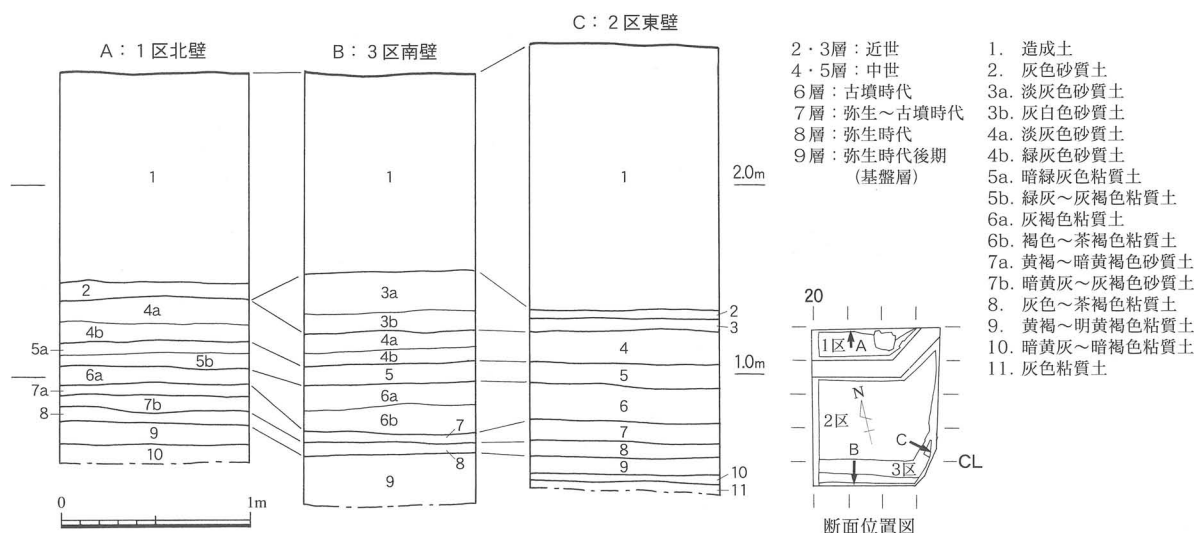


図22 土層断面柱状図 (縮尺 1/40)

8層：灰色～茶褐色粘質土で、弥生時代後期相当の耕作土と考えられる。上面の標高0.6～0.8mである。8層上面では、畦畔と考えられる高まりや溝数条を確認している。

9層：黄褐色～明黄褐色粘質土である。基盤層であり、上面で弥生時代後期の土器片を含む土器集中遺構を確認しているほか、隣接する第11次調査地点からつながる弥生時代の大畦畔を確認している。上面の標高は0.55～0.75mである。

10層：暗黄灰色～暗褐色粘質土で、無遺物層である。

11層：灰色粘質土であり、下層に行くにつれ灰色砂をラミナ状に含む部分がある。無遺物層である。

② 遺構・遺物の概要

〈近 世〉(図23)

3層上面で、土坑11基・溝4条・ため池状遺構1を検出した。これらの近世遺構は、主に調査区の南側2・3区で確認した。北側の1区では削平によって中世遺構面上まで破壊が及んでいることもあるが、井戸・土坑等の深い遺構も近世段階のものは認められなかった。

土坑は3区西端と2区東側に偏在して構築されている。土坑1～4・6の5基は、3区の西端に切り合い関係を持って集中的につくられている。そのうち数基には木柵の痕跡がみられ、野壺としての機能が窺われる。第12次調査地点B・C地点においても近世の土坑が20基確認されているが、これらのうち1基は墓、他はゴミ穴と推定され^①、本調査地点とは様相を異にしている。

3区では近世の東西方向の畦畔1条を検出している。この畦畔は近世～近代にかけて継続して営まれたものと考えている。CL～CMライン間には中世～現代まで掘り返しを繰り返しながら利用された東西方向の溝があり、この溝より南側には、畦畔や野壺等の存在から水田域が広がっていたことが窺える。

この東西溝の北側では、溝にとりつき形で、ため池状遺構(D13)を検出した。ため池状遺構は東西14m、南北7m、深さ1.6mの隅丸方形で、西側には幅2m、深さ1.4mの溝がとりつき、第11次調査地点内で終わっている。また南西角と南東角の2カ所から、幅1.5m、深さ0.8mの溝が検出され、南を流れる東西溝にとりついている。ため池状遺構の中からは陶器片・瓦片のほか、漆塗り碗・キセルなどが出土している。こうした状況から水を調整する機能を持つ水ためであったことが予想されるが、具体的な機能・用途については現在のところ不明である。

〈中 世〉(図23)

4層～6層上面で、井戸10基、土坑3基、溝25条、ピット多数を確認した。柱穴群や井戸・土坑は調査区の北西部を中心に検出された。これらの遺構は南北方向の大きな溝(幅4～5m、深さ1.5m)や、東西方向のやや浅い溝(幅1～2m、深さ0.3m)によって区画されており、屋敷地を構成しているものと考えられる。

井戸は調査区北西部を中心に検出した。いずれも木柵等は認められなかった。井戸は平安時代後半頃につくられたものが最も古く、以後、室町時代にかけて次々に構築されたものと考えているが、詳細な時期については検討が必要である。井戸からの出土遺物のあり方は様々であり、調査区西端部で検出された井戸1からは土師質の碗・杯・皿のほか、瓦器碗や白磁碗など豊富な遺物が出土した。これらは多くの炭や焼土とともに出土している。井戸1の所属時期は平安時代後半～末頃と考えられる。ほぼ近接した時期と考えている1区で検出した井戸(土坑18)からは、土師質土器碗・瓦器碗と櫛・呪符木簡それぞれ1点が出土している(木簡については第3節参照)。そのほか2区で検出した井戸(土坑20)には、土師質鍋がすっぽりと入れられていた。

南北方向の溝3条(D5・6・15)からは碗・鍋などの土師質土器の破片のほか、輸入陶磁器・瓦が出土した。これらの溝の時期は中世後半(室町時代)の範疇で考えている。南北方向の溝のうち、最も東に位置する溝15は幅2.5～3mで、南端部は東西溝の北側で収束し、東西溝との間には幅20cm程の浅い導水路がとりついていた。収束部では底にウマ下顎骨を1点検出した。溝15底面より導水路部の底面は40cmほど浅く、近世のため

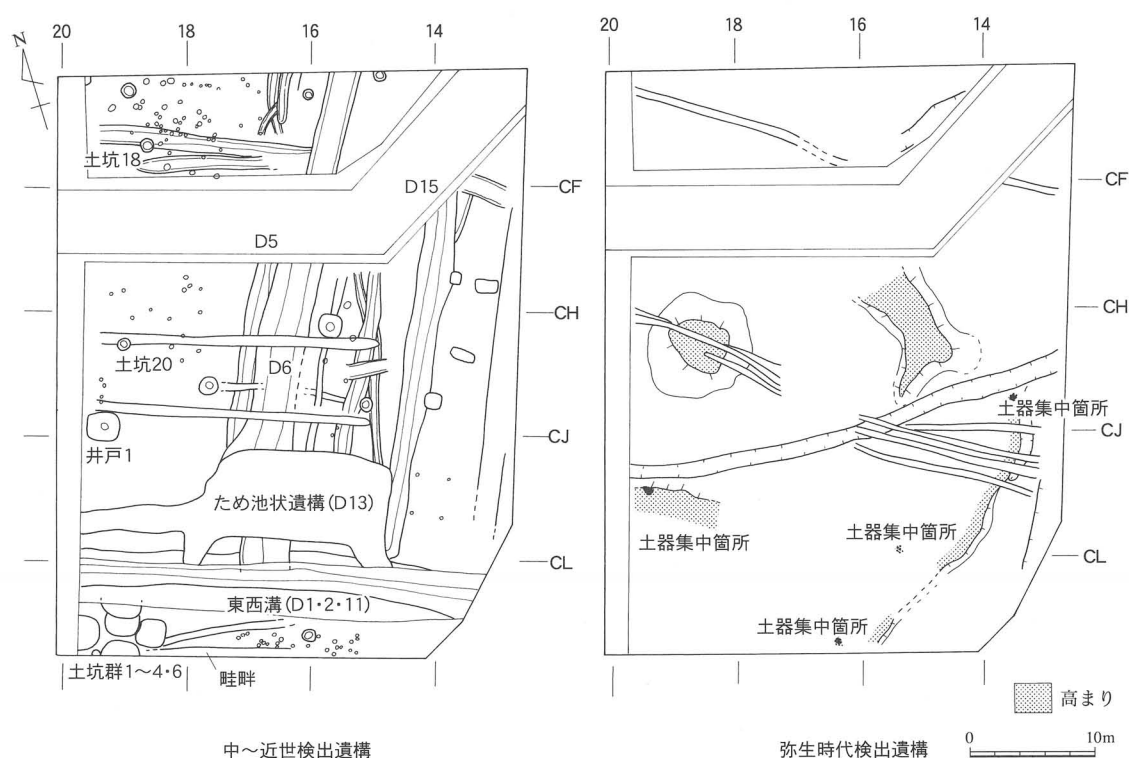


図23 検出遺構全体図（縮尺1/600）

池状遺構と同様に、水を調整する機能があったことが窺われる。詳細な時期については今後の整理作業を経て慎重に検討していくが、南北方向の溝は、次第に東へと位置を変えている可能性があり、集落あるいは屋敷地が拡大している状況が推定される。

柱穴は調査区北西に偏在して確認された。1区西半に最も集中しており、2区の北西部と、3区中央部分にややまとまっている。建物を復元するには至らなかったが、1区南端寄りで東西方向、2区の北側で南北方向に並ぶラインを、それぞれ1条確認した。また2区南東部に、方形に並ぶ4基の柱穴を検出している。

〈弥生時代後期〜古墳時代〉（図23）

7〜9層上面で、弥生時代〜古墳時代にかけての遺構を確認した。溝9条、土器集中箇所4箇所である。当該時期は、本調査地点周辺は耕作地として利用されたことが窺える。

7層上面では2区で北西から南東に走行する小規模な溝を数条検出した。

8層上面では1区で北西―南東方向の溝を1条、また2区の南側で、南西から北東へ走行する溝1条を検出した。本溝は第11次調査地点で検出していた大畦畔に伴う溝に連なるものである。この溝の南側は基盤層である9層が高い部分にあたり、畦畔の可能性が考えられる。この高まりの部分で2箇所、土器集中箇所を確認した。特に掘り込みは設けず、複数個体分の土器片がひとかたまりに置かれている状況であった。同様の土器集中箇所は2・3区で他に2箇所確認している。第9次調査地点では畦畔の交差部分に同様の土器集中箇所を確認している。いずれも時期は弥生時代後期と考えられる。

9層上面では2区の北側部分で、高まり部分2箇所を確認した。同様の地形は第9次調査地点でも確認されており、機能としては水田耕作等の耕作活動による削平を受けずに残り残された部分と考えられる⁽²⁾。

7〜9層検出中の遺物出土量はきわめて少なく、本調査地点の古墳時代以前については遺構・遺物ともに希薄な様相と言える。

以上、本報告の内容は暫定的であり、詳細な報告は今後の整理・検討を経て正式に行う。(岩崎志保)

註(1) 高田浩司2003「近世の櫛について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(2) 百間川原尾島遺跡等でみられる「島状高まり」に類するものと考えられる。

平井勝ほか1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 岡山県教育委員会

2. 鹿田遺跡第15次調査(総合教育研究棟ポンプ槽・検水槽設置、鹿田BQ～BS45・46区)

a. 調査の成果

本調査地点は鹿田遺跡第13次調査地点(総合教育研究棟建設地)の南東隅に隣接する。今回の調査では、近世の土坑、中世の溝群と土坑、古墳時代初頭の井戸と溝を検出した。このうち、近世土坑、中世溝は第13次調査東半でも検出されており、東側に遺構が広がることを確認できた。古墳時代初頭の井戸では、上・中・下位の3群に分かれた遺物群を検出した。井戸での活動を考えるうえの良好な資料となろう。第13次調査で検出された大規模な土器だまりが連続して検出されることも予想されたが、本調査地点では確認されず、本調査区の北側に広がるか、収束するものと考えられる。

調査期間：2003(平成15)年10月16日～29日

調査面積：30.4m² 調査担当：野崎貴博

主な遺構・遺物：近世土坑1基、中世の溝5条・土坑1基、古墳時代初頭の井戸1基・溝1条、古墳時代初頭の土器・木器

b. 調査の経過

鹿田地区では、2002年度から総合教育研究棟の建設工事が行われており、建設に先立って2002年4～10月に第13次発掘調査を実施している⁽¹⁾。2003年度になり、建物周辺の外構工事が施工され、順次立会調査を行ってきたが、総合教育研究棟の南東に隣接する本地点において、雨水・実験排水を排出するためのポンプ槽・検水槽の建設計画が具体化するに至った。第13次調査では古墳時代の大規模な土器だまりをはじめ、井戸や溝などの遺構や、中世の集落跡が確認されており、これらの遺構が連続することも予想されたため、対象となる面積は小さいものの、本地点についても発掘調査を実施することとした。

調査の実施に先立ち、2003年10月14、15日の両日で造成土・支障配管等の攪乱を除去した。発掘調査は10月16日から開始し、近世・中世・古墳時代の遺構面を調査したうえで、10月29日に終了した。

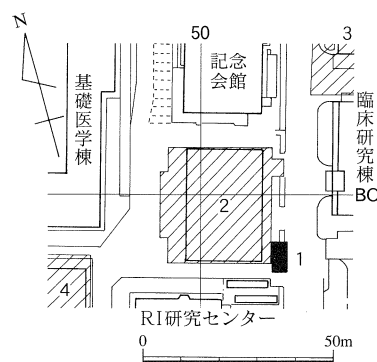
c. 調査の概要

① 位置(図24)

本調査区は鹿田地区のほぼ中央にあたり、総合教育研究棟(第13次調査地点)の東南隅に接する。北に記念会館、東に臨床研究棟、北東に管理棟(第5次調査地点)、南西に基礎研究棟(第7次調査地点)が建つ。

② 層序(図25)

本調査地点は、調査区の北側約1/5が攪乱によって失われ、西側も第13次調査範囲に重複しており、残存状態は不良であった。そのため土層の観察



1. 第15次調査地点
2. 第13次調査地点(総合教育研究棟)
3. 第5次調査地点(管理棟)
4. 第7次調査地点(基礎研究棟)

図24 第15次調査地点位置
(縮尺1/2000)

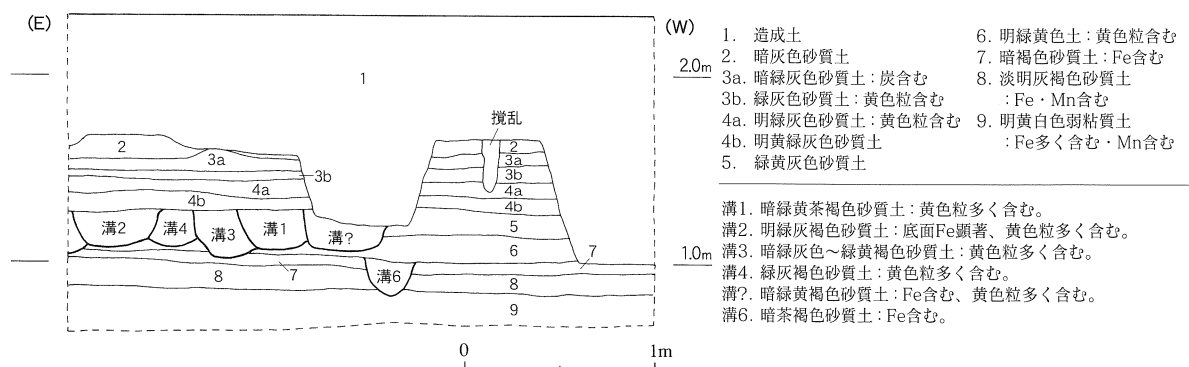


図25 調査区南壁土層断面（縮尺1/40）

は調査区南壁・東壁で行っている。以下、各層の特徴を記しておく。

- 1層：大正時代以降の造成土で、現地表面から約1m下位まで堆積している。現地表の標高は約2.5mである。
- 2層：暗灰色砂質土で、近代の耕作土である。上面の標高は約1.6mである。
- 3層：緑灰色砂質土で、色調から上下に2分している。3a層は暗緑灰色砂質土で炭・土器片を含む。3b層は緑灰色砂質土で黄色粒を含む。近世に属する。3a層上面で土坑1基を検出した。上面の標高は約1.6mである。
- 4層：明緑灰色砂質土で、色調から上下2層に細分している。4a層は明緑灰色砂質土で、中世の包含層である。
- 5層：緑黄灰色砂質土で、中世の包含層である。調査区を南北方向に並行して走る溝群、東西方向に走る溝はこの層に帰属する。
- 6層：明緑黄色土で、黄色粒を含む。中世の包含層である。
- 7層：暗褐色砂質土で、鉄分を含む。この層の上面は古墳時代前期の面であり、井戸と溝を検出している。
- 8層：淡明灰褐色砂質土で、鉄分、マンガンを含む。遺物はほとんど出土していない。隣接する第13次調査地点の成果から、弥生時代後期の堆積層と考えられる。
- 9層：明黄白色弱粘質土で、鉄分、マンガンを含む。遺物は出土していない。

③ 遺構・遺物

本調査区においては、近世・中世・古墳時代初頭の遺構面を確認した（図26）。

近世：3層上面で土坑1基を確認した。南半は攪乱によって失われているが、北半の平面形は半円形を呈しており、円形の土坑が復元される。隣接する第13次調査地点の調査区東半では多数の近世土坑が検出されている。本調査地点でも近世土坑を検出したことにより、これらの土坑群の範囲がさらに東に広がることを確認できた。

中世：5層上面から掘削された南北方向、東西方向に走る溝群・土坑1基・ピット1基を確認した。また南壁で溝と思われる2ヶ所の落ち込みを確認したが、平面的に確認することはできなかった。

南北方向の溝（溝1～4）は並行して掘削されているが、いずれも切りあい関係を有しており、先行する溝が埋没した後、新たな溝を再掘削したものと思われる。東西方向の溝（溝5）は南北方向の溝群を切って掘削されており、今回検出した溝の中では最も新しい段階に掘削されたものである。土坑は、溝群の西で検出した。大半は攪乱によって失われており、本来の規模は不明である。

古墳時代初頭：古墳時代初頭の遺構は、7層上面で井戸1基と溝1条（溝6）を検出した。

南北方向に走行する溝6の規模は、幅約30cm、深さ約15cmと小規模なものである。溝の走行方向を中世の溝群と比較すると、北東から南西に向かってやや斜行している。第13次調査地点で確認された弥生時代後期の溝も北東から南西に向かってやや斜行しており、地形の影響をうけている可能性もある。

井戸は調査区西側で検出した（図27）。井戸の西側は攪乱により失われていたが、現状で南北約150cm、東西約130cmで、やや歪んだ長楕円形を呈している。井戸の断面形は、上方の約1/4は挿鉢状に大きく開き、屈曲

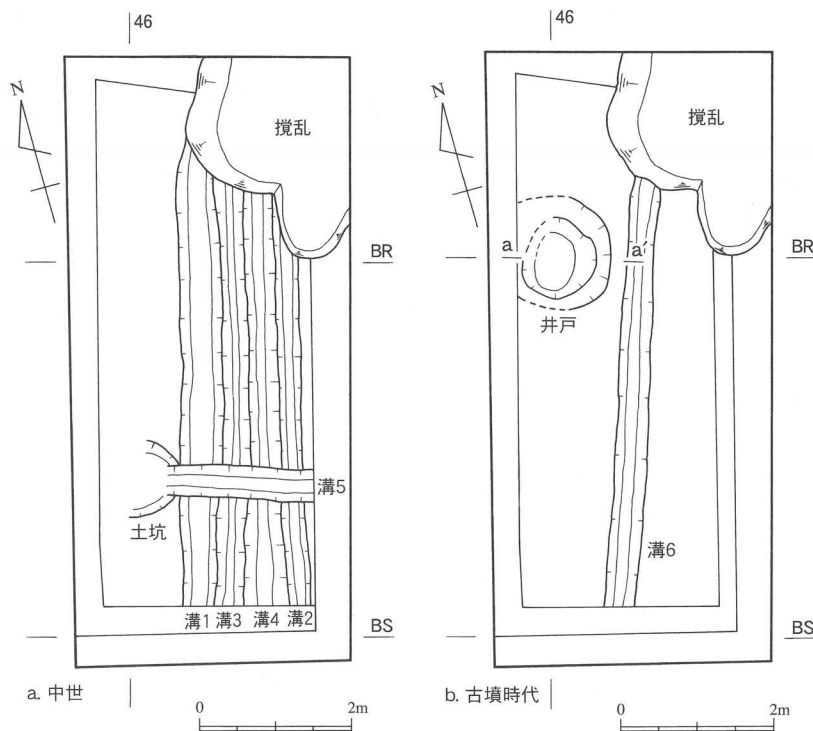


図26 検出遺構平面図 (縮尺 1/100)

部から底面までは径約40cm 程度の筒状の掘り方となる。

埋土は1～3層が砂質土、4・5層は炭化物を多量に含み、ピット状に落ち込む粘質土層である。6～11層は大きく皿状に開く開口部を埋める砂質土～粘質土層、12～17層は厚く堆積する粘土層、粗砂と植物遺体を多く含む粘土層が交互に堆積する18～21層に大別できる。

井戸の内部に認められた遺物群は、上位・中位・下位の3群に分かれる。上位の遺物群は井戸筒部の埋没後、径約30cm、深さ約20cmの規模で掘り込まれたピットの内部(4・5層)で、甕がつぶれた状態で検出されたうえ、埋土には炭化物を多く含んでいる。中位の遺物群は、上位の遺物群から約10cmの無遺物層を挟んだ14層で検出された。ほぼ完形の壺2個体、杭2本、板材1枚が出土している。壺は直口壺、小形丸底壺が出土しているが、直口壺は井戸のほぼ中央に、小形丸底壺は東側に寄せて収められていた。2個の壺の上には、礫がのせられた状態で入れられている。2本の杭はいずれも横倒しの状態であった。この遺物群の最上位には板材が置かれている。下位の遺物群は、20層の最下部から出土した。土器の量は少なく、小形の台付鉢1点、甕の破片数点が出土したのみである。小形の台付鉢は逆さに伏せた状態で出土した。

これらの遺物の出土状況と堆積の状況をあわせて考えると、下位の遺物群は湧水点より下位にあたり、井戸の使用段階における行為を示すと考えられる。中位の遺物群は湧水点より約50cm程度堆積が進んだ段階であり、井戸廃絶後、埋没途中の段階における行為を示す。また、上位の遺物群は掘鉢状に開く開口部付近まで筒部が埋没した後、ピット状の掘り込みを掘削し、その掘り込みの中で甕を用いて煮炊きを行っていると考えられる。

以上のように、この井戸では使用から廃棄までの間に、土器を用いた行為が3回行われていたことが判明した。井戸における土器を用いた行為を考えるうえで重要な事例といえよう。

④ 第13次調査地点との関係

隣接する第13次調査の東半部では、中世段階の遺構として、北側・南側に東西方向の溝、本調査地点と接する

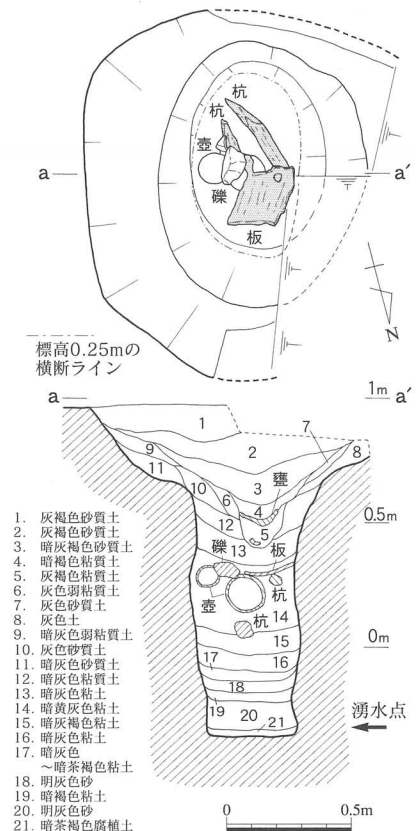


図27 井戸 平・断面図 (縮尺 1/30)

東側に南北方向の溝が掘削されている。これらの溝で区画された内側では、多数のピット群、建物や井戸が確認されているが、建物の主軸と溝の方向はほぼ合致しており、溝で囲まれた屋敷地と考えられる空間が形成されていることがわかる。本調査区で確認した溝は、第13次調査地点東辺を南北に走行する溝と並行しており、一連の区画溝と考えられる。

次に、弥生～古墳時代の遺構についてみておきたい。第13次調査地点の地形は、南北が比較的高く、中央には東西に窪地が通るが、調査区中央からは南東に折れて本調査地点に至るように延びる。今回の調査区は狭小な範囲であったため、明確な落ち込みは確認できなかったが、調査区全体が窪地の中に含まれる可能性もある。

さて、第13次調査地点で確認された東側の土器だまりは窪地の中に形成されており、今回の調査区にも延びる可能性があったが、北半が攪乱を受けていたためか、検出されなかった。しかしこれ以上南に延びる可能性はなく、東に伸展するか、あるいは収束するかのいずれかであると推定される。

今回の調査地点で検出した井戸は、この土器だまりの南に隣接して位置する。ところで、第13次調査地点でも、B O46付近では土器だまりの東に方形の井戸が確認されている。この井戸の底には完形の甕が2個体入っていた。第13・15次調査地点で確認したこれらの井戸はともに、①土器だまりに近接して井戸が掘削されること、②いずれも土器を用いた行為が確認されること、という共通点があり、井戸と土器だまりとの関係が注目される。

なお、本調査の成果は現在整理途上にあるため、本報告の内容は現時点での理解を示す暫定的なものであり、今後、修正・変更の可能性があるのであることを断っておきたい。 (野崎)

註(1) 光本順2003「鹿田遺跡第13次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』pp.26-29 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2節 立会調査の概要

鹿田地区では前節で報告した第14次調査・第15次調査以外に、小規模工事に伴う立会調査を12件実施している。このうち、包含層が確認されたものは9件である。ここでは、遺構が確認されたもの、地形復元に有用なデータが得られたもののうち、総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査(表8、調査番号5)、総合教育研究棟外構工事(雨水・汚水・実験排水路敷設)に伴う調査(表8、調査番号9)について報告する。

1. 総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査(鹿田BS～BZ45区、CA～C O46区、C O45区)

a. 調査の経過

本調査地点は、鹿田地区のほぼ中央、総合教育研究棟からエネルギーセンター西側の駐車場入り口までを南北に接続するもので、管路長約90mをはかる。周辺には、北西に第13次調査地点(総合教育研究棟)、東に第9・11次調査地点(病棟)、南東に第12次調査地点(エネルギーセンター)がある。調査は2003年8月21日から9月12日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

b. 調査の概要

1層は造成土である。2層は近代の暗灰色粘土、3層は近世の明緑灰色粘土である。樺4～5間で近世土坑を確認した。4層は明灰茶褐色砂質土で、中世の包含層であり、最も南端の樺1では柱穴と考えられるピット数基を確認した。5層は茶褐色砂質土で古代、6層は灰茶褐色砂質土で弥生時代後期～古墳時代の包含層と考えられ

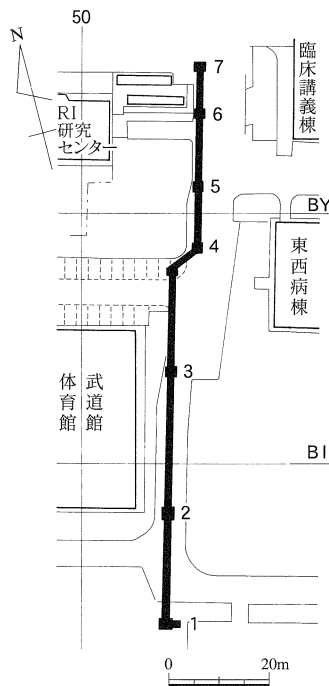


図28 調査位置 (縮尺 1/1500)

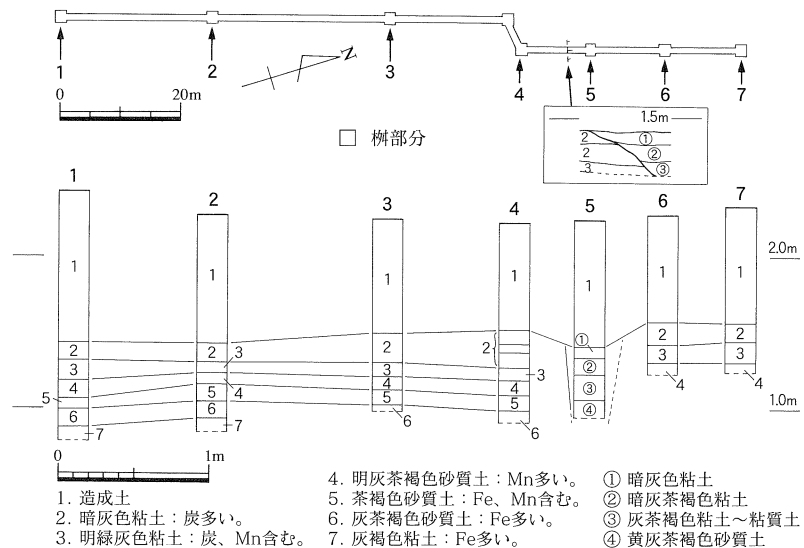


図29 土層柱状図の位置と土層断面 (縮尺 1/1250、1/50)

る。7層は灰褐色粘土で、弥生時代中期の包含層の可能性がある。また、榦4～6間で確認した①～④層では、粒子が細かく粘性の強い湿地性の堆積物と考えられる粘質土層が確認された。

土層観察から、同地域は、榦1～4間では大きな地形の起伏は認められず、おおむね平坦な地形であるといえる。榦4～5間で2層から切り込むかたちで粘性の強い粘土が堆積しており、この部分には谷状の落ちがあったものと推定される。ただし、榦6ではこの堆積が認められず、谷状の落ちは榦4～6間の幅で収まると考えられる。

c. まとめ

今回調査した污水管が南端部で接続する污水配管は1999年度に立会調査を実施した調査46の区間⁽¹⁾にあたる。鹿田地区の南半部を南北に約170mにわたって掘削したことになる。その成果もあわせると、鹿田地区では南辺付近に中世段階の幅広の溝が多数掘削される。それ以北では、第9・11次調査地点で検出した溝が通る部分もあるが、今回の調査の榦5付近で確認した谷状の落ち込みまで、中世以降は比較的安定した微高地が広がることが予想される。

(野崎)

註(1) 横田美香2000「鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報17』pp.23～25 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2. 総合教育研究棟外構工事に伴う調査 (鹿田B L～B S 45～53区)

a. 調査の経過

本調査は2002年度に発掘調査を実施した鹿田遺跡第13次調査地点の周囲に埋設される雨水・污水・実験排水設備敷設に伴う立会調査である。本調査地点の周辺には、北東に第5次調査地点(管理棟)、南西に第7次調査地点(基礎研究棟)がある。また、第13次調査地点では近世・中世・古墳・弥生の各時期で遺構が密に検出されており、今回の工事においても掘削深度の大きい部分では遺構にかかることが予想された。調査は2003年10月8日から11月19日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

b. 調査の概要

1層は近代以降の造成土である。2層は明灰褐色粘土で近代の堆積である。3層は暗灰色粘土で近世の堆積である。4層は暗緑灰色粘質土、5層は暗緑灰褐色砂質土で、中世の堆積層である。6層は暗灰黄褐色砂質土で、古墳時代初頭の遺構が上面から掘削されている。7層は灰黄褐色砂質土で、弥生時代後期の包含層である。8層は南辺で確認された淡青灰色粘質土、9層は明黄褐色砂質土でいずれも弥生時代後期以前の堆積層と考えられる。

遺構は第13次調査範囲の東側管路（断面6）で密に検出された。検出された遺構は5層・6・7層上面から掘削されている。5層では井戸、土坑を確認した。土坑からは播鉢、椀等の中世の遺物が出土しており、5層から掘削される遺構は中世に属すると考えられる。6・7層では溝、ピットを確認した。溝からは高杯等が出土しており、6・7層の遺構は弥生～古墳時代前期に属すると考えられる。

c. まとめ

本調査区は第13次調査範囲を取り囲むように設定された排水路であるが、北辺・西辺では掘削深度が小さく、遺構の広がりを確認し得なかった。東辺・南辺では周辺へ遺構が広がることを確認できたが、第13次調査地点で確認された3ヶ所の大規模な土器だまりの延びについては明確にはできなかった。

(野崎)

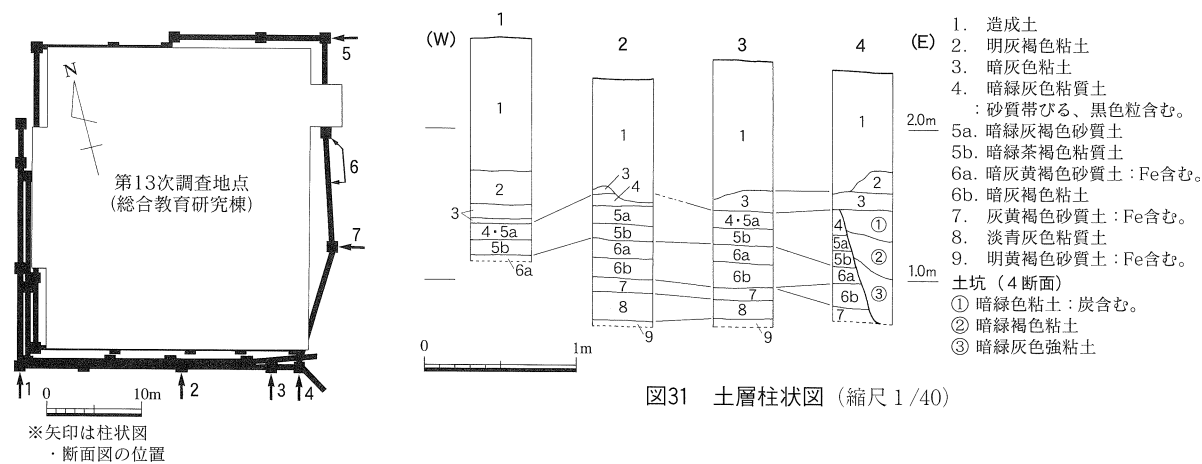


図31 土層柱状図（縮尺1/40）

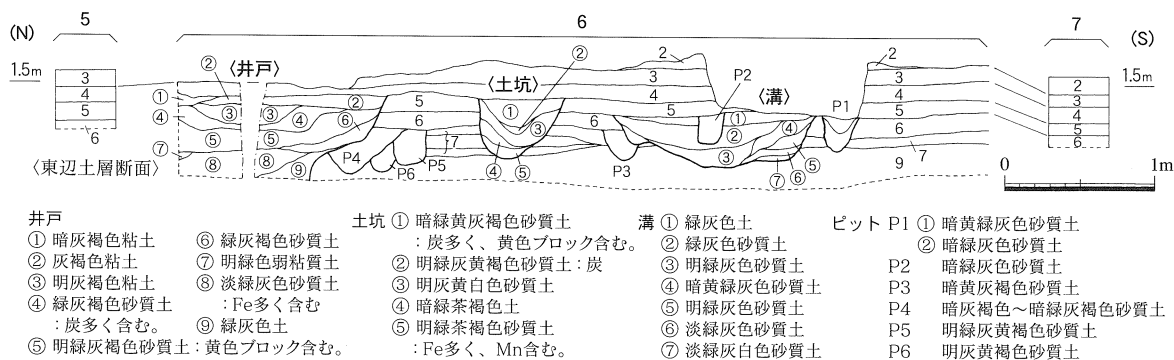
図30 調査位置・土層柱状図位置
（縮尺1/800）

図32 5～7区間 土層断面（縮尺1/40）

表8 2003年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(GL:m)	備考
1	発掘	CD～CM12～20	医病	病棟新営2期工事	7.31～12.17	1.7	調査面積1331m ² 、弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝、近世のため池・土坑（鹿田遺跡第14次調査）
2	発掘	BQ～BS45・46	医	総合教育研究棟外構工事（ポンプ槽・検水槽）	10.16～29	1.9	調査面積30.4m ² 、中世溝群、古墳初頭井戸・溝（鹿田遺跡第15次調査）
3	立会	CN12 CM・CN21、CR27	医病	基幹・環境整備工事（外灯・樹木・自転車置場撤去・移設、排水配管掘削）	7.14・23	0.8	外灯移設地点では近世層？まで掘削、その他造成土内
4	立会	BS45、BL43～45	医	総合教育研究棟新営機械設備工事（ガス配管埋設）	8.21～22	0.85	近世層確認
5	立会	BS～BZ45 CA～CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事（屋外排水）	8.21～9.12	1.7	弥生中期？包含層まで掘削、近世土坑・中世ビット多数確認、低地部確認
6	立会	BJ43～45	医	総合教育研究棟新営電気設備工事	9.16～17	1.0	GL-0.65m で近世層確認
7	立会	AK61	医	医学部外灯建柱工事	10.2	1.0	造成土内
8	立会	BQ～BS45	医	総合教育研究棟新営機械設備工事（給水・消火配管埋設）	10.6	0.8	近世層確認
9	立会	BL～BS45～53	医	総合教育研究棟外構工事（雨水・汚水・実験排水）	10.8～11.19	0.8～1.75	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確認
10	立会	BR～BS50～54	医	総合教育研究棟給水配管埋設工事	11.11～13	0.85～1.33	多くは既設、一部で中世層確認
11	立会	BK47～53 BS50・53	医	総合教育研究棟外構工事（樹木移植）	11.17・18、12.2	0.65～0.9	多くは造成土内、一部で近代層確認
12	立会	BK・BR46	医	総合教育研究棟外構工事（車止め設置）	11.19	0.6～0.8	造成土内・既掘工事内
13	立会	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事（外灯）	11.2	1.4	中世層まで掘削
14	立会	AS～AY65・68	医	安全衛生管理対策（床・換気等改修）工事（解剖実習棟改修工事）	04.1.16	0.5～0.9	既設工事内

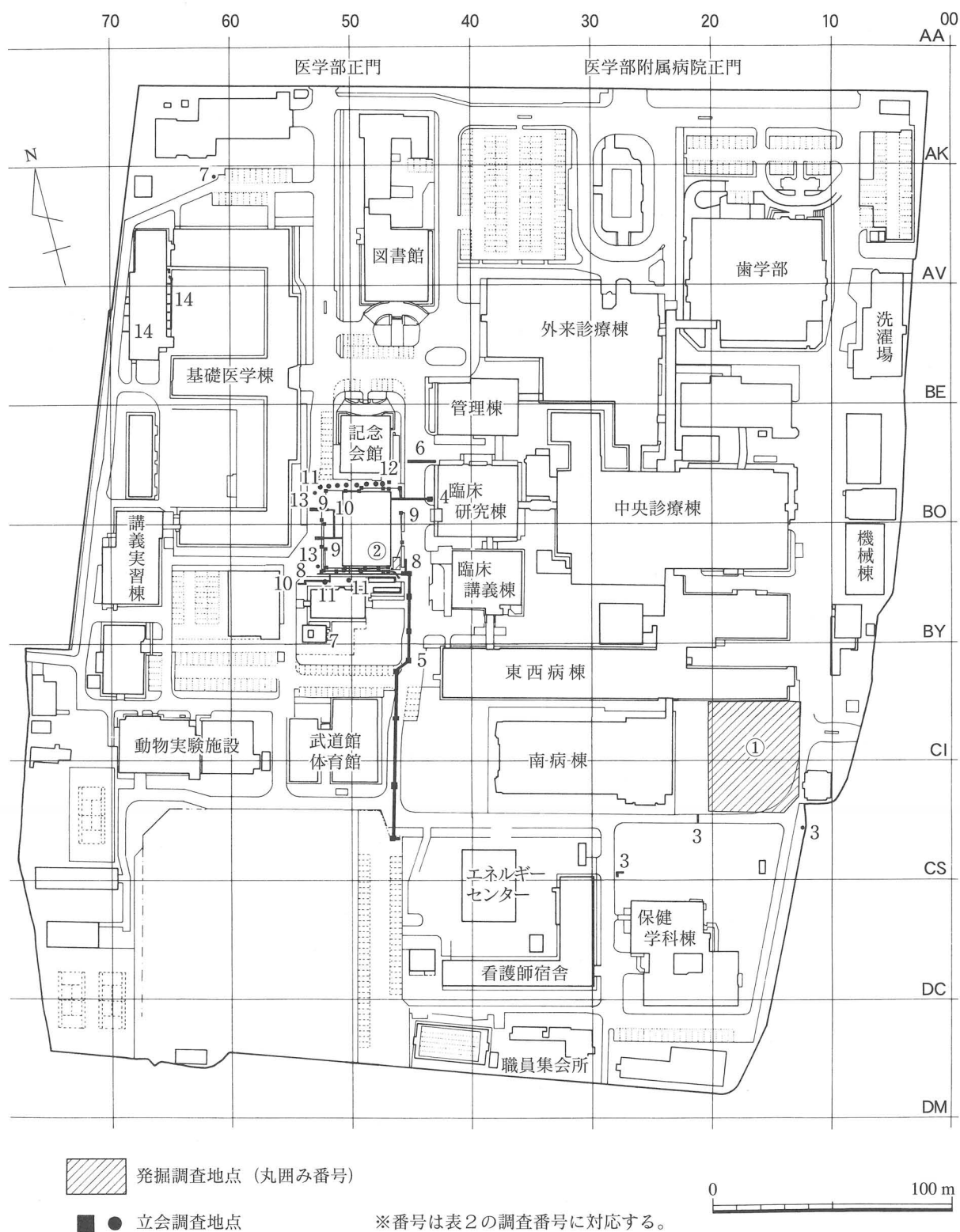


図33 2003年度の調査地点【2】一鹿田地区一 (縮尺 1/2500)

第3節 鹿田遺跡の研究

1. 鹿田遺跡第14次調査出土木簡について

岩崎 志保

a. はじめに

2003年度に実施した鹿田遺跡第14次調査では、中世の井戸より木簡1点が出土した。鹿田遺跡での木簡の出土は今回で4例目であり、貴重な事例が増加したことになる。調査の概要については「第1節」を参照されたい。本稿では今回出土した木簡の概要を紹介し、これまでの事例も加え、その意義について考えてみることにする。なお、遺構・遺物に関する詳細については、まだ整理途中であることを断っておきたい。

b. 第14次調査出土木簡

① 出土遺構

木簡が出土した遺構は、調査区の北側、鹿田地区構内座標ではC E18区に位置する土坑（井戸）である。上面が径1m程のほぼ円形を呈する素掘りのもので、検出面からの深さは1.6mである。上面から深さ0.5mまではややすり鉢状に傾斜し、それより下位はほぼ垂直に近い傾斜である。

埋土は9層に分けられる。木簡は、使用中の流入土と考えられる9層〈灰色粘土〉の上に堆積する8層〈灰色粘土〉中より出土している。8層には有機物を多く包含している。木簡と一緒に出土した遺物には木製櫛1点・土師質碗1点・瓦器碗2点等があり、これらの遺物から推定される本遺構の年代は平安時代後半～末である。

② 木簡の形状と釈文

出土した木簡は大きく3片に割れているが、接合する破片であり、最大長43.3cm、最大幅5.5cm、最大厚0.6cmである。上端は角を落として円みをつけている。下端は欠損しているため、全長や、全体の形状は不明である。保存状況は比較的良く、上部1/4の墨書は肉眼でも判読が可能であった。中央部分はおそらく外気にさらされていた影響と考えられる面の荒れや、反りが認められる。この部分については赤外線カメラ撮影装置による撮影での判読を行った。

本資料は「呪符」木簡である。表面には上から「天岡星」の文字が認められる。天岡星は道教の神で北斗

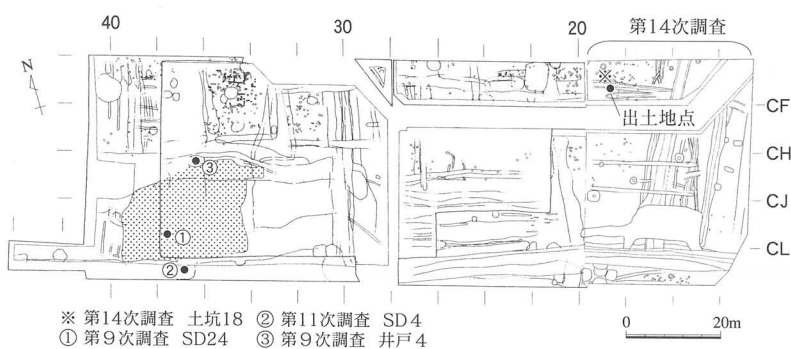


図34 鹿田遺跡第9・11・14次調査木簡出土地点（縮尺1/1600）



図35 木簡出土状況



図36 鹿田遺跡出土木簡

七星の別名ということである。天岡星の効能には治病・消災・延命が主たるものとして挙げられる。続いて星座を示した図柄と、「辟邪」とも見られる顔面、「星」と見られる字が描かれている。星座を示すと見られる図柄は中央部より下位にも認められる。また下の破片には、ちょうど断裂部分に集中して文字が書かれている。四文字ずつ、少なくとも三段、おそらく四段にわたって書かれていることがわかる。最上列には「王王王王」、二段目「□田□□」三段目「木火金水」、四段目「□□□□」、その他にも墨痕は認められるものの、判読することはかなわなかった。「木火金水」とは陰陽五行説に関連する文言である。中国に起源する思想で、日本では古代において特に重んじられたものであり、古代人の生活に必要な五つの素材(木火土金水)を示している。木火金水の順となるのは「五行相生説」が基礎となるものである。

裏面にははっきり文字と認められるものはないが、下方に墨痕かと思われるものは見られる。

このような「天岡星」呪符木簡の出土例は、草戸千軒遺跡(13次S X落ち込み・27次S K1825)・尾道市街地遺跡等、他にも数例が知られている(図37)。

c. その他の鹿田遺跡出土木簡

鹿田遺跡からは、以前にも木簡3点が出土している(図36)。これらのうち、③の詳細については既に報文があるため、ここでは①②の2点について述べることにする。

①は今回の出土木簡と近似した時期の、同じく「呪符木簡」である。一辺25m程の方形を呈する池状遺構の底面から出土した。墨書の内容については残存状況が悪く、赤外線カメラ撮影装置によってようやく判読できる程度であった。

②は墨痕がほとんど見えず、墨で書いた部分の木質がわずかに浮き上がっていることから判読できた内容である。かなり風化が進んでいることから、野外でさらされていたことが窺える。「×正四年」の年号から推定される元号は「寛正四年（1463）」・「永正四年（1507）」・「天正四年（1576）」のいずれかである。内容は何らかの仏事に関するもので、菩提か逆修のため供養法楽をおこなった記録であることが窺える。

d. まとめ

これまでに鹿田遺跡から出土した木簡は、大きく分けると呪符木簡と供養木簡とに大別できそうである。また、時期的にみると呪符木簡は平安時代のもの、供養に関するものはそれよりも新しく室町時代以降のものと分けることも可能である。

呪符木簡は、全国的に見てもその多くが集落跡からの出土であり、鹿田遺跡の例も同様である。その使用目的としては①物忌み、②地鎮、③疫病除け、④悪霊除けの4つに大別される。このうち「天岡星」符は疫病除けに使用されることが多いようである。また9次調査の呪符木簡については判読できる文言から、「急々如律令」という呪句が続いていたものとみられ、物忌みに使用された可能性が高い。

このような中世におけるまじない・信仰の証左は、日本各地で見つかってきており、当時の生活の一端を示す貴重な資料である。鹿田遺跡が特異な場所であったのでは決してなく、たとえば近隣では、岡山市百間川米田遺跡や福山市草戸千軒町遺跡でも呪符木簡の出土が認められるように、中世の集落には普通に見られる習慣・風習であったといえる。その一方で、平安時代後期の星宿信仰は主として貴族の間に流行していたということや、祈祷にはそれなりの財力が必要といったことから、呪符木簡を出土する集落の性格や位置づけといった点も興味深いところである。

今回は資料紹介にとどまったが、今後遺構・遺物の詳細な検討を行っていく中で、鹿田の集落での空間的・時期的変遷を整理して、改めて木簡資料についても考えていくこととしたい。

鹿田遺跡の木簡釈文に関しては、岡山大学文学部久野修義・今津勝紀先生より御教示を得た。なお、木簡資料については、暫定的な内容であり、今後の整理・検討を経た後に正式報告を行うこととする。

引用・参考文献

山本悦世・久野修義2000「岡山・鹿田遺跡」『木簡研究』第22号 pp.203-205 木簡研究会

喜田敏・岩崎志保2000「鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

広島県立歴史博物館1990『中世の民衆とまじない（春の企画展図録）』

巽淳一郎1996「まじないの世界Ⅱ」『日本の美術』No.361

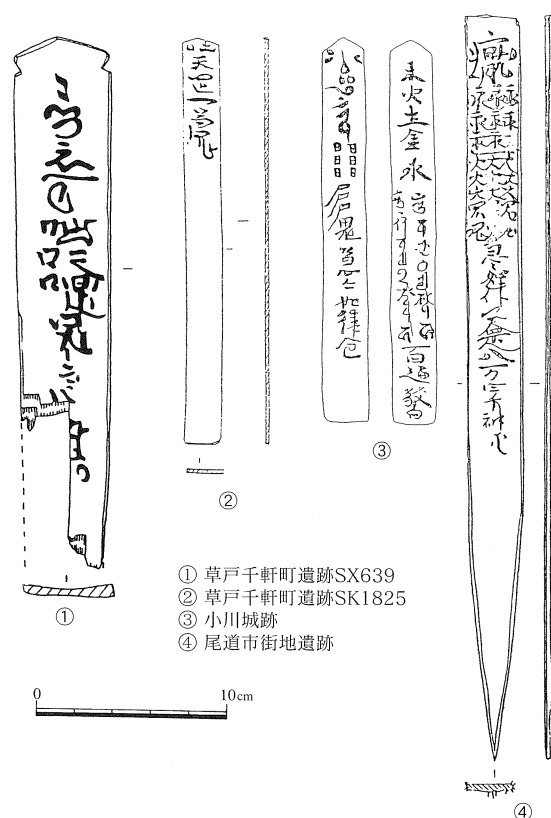


図37 木簡の類例（縮尺1/4）

第3章 その他地区の調査研究

第1節 東山地区の調査概要

2003年度は東山地区で1件の立会調査を実施した。調査1は附属教育実践総合センター環境整備工事に伴う外灯移設である（表9）。移設元・移設先の2カ所で、いずれも0.8×0.8mの範囲をGL-1mまで掘削し、近代層と思われる青灰色粘質土まで達した。（岩崎）

表9 2003年度東山地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	備考
1	立会	—	教育	教育学部附属教育実践総合センター環境整備工事	04.2.25	1.0	青灰色粘質土(近代?) まで掘削

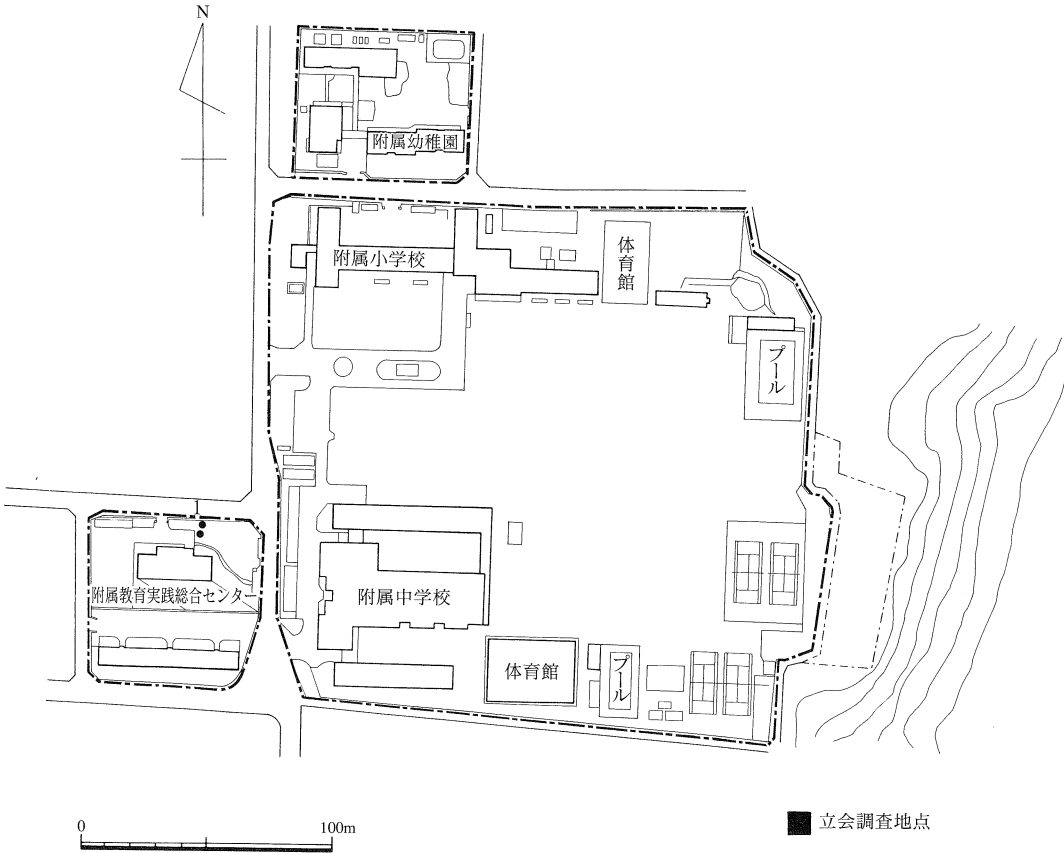


図38 2003年度の調査地点【3】一東山地区一（縮尺1/3000）